
殺し屋ジョン

うい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋ジョン

【Nコード】

N2049T

【作者名】

うい

【あらすじ】

幼い時から孤児院で育てられたジョン。

そこに、一人の男が現れ、ジョンを引き取りたいと申し出る。

しかし、その男は殺し屋だった。幼い頃から殺し屋としての知識を詰め込まれたジョンは、男の殺し屋家業を継ぐ。

ようやくジョンが一人立ち出来る歳になった時、男は仕事で死んでいた。

ある日、いつものように仕事の話が舞い込む。

いつものようにジョンは任務をするが、次々に警備が倒れていく。そして、血に染まった中に立つ少年は言った。

「君と同じ殺し屋だよ」

一悶着を終えたジョンの前に、とある情報屋ジミアは出回っている噂を伝える。「神の見えざる手が奴の狙いだ」

殺し屋VS殺し屋

その日から、殺し屋ジョンの非日常は非日常へと変わる（？）

楽しい楽しいパーティーへの招待状（前書き）

別の読み方ルビが分かりづらいかも知れませんが

やたら多いルビと、内容の食い違いを修正しました。

楽しい楽しいパーティーへの招待状

ワシントン州にある、とある一軒家。

なんの変哲もない、いたって普通の一軒家に、見るからにいたって普通な青年が住んでいる。

名前はジョン。年は二十五歳。絶賛彼女募集中である。冴えない顔であくびをする様は、幼さすら感じられる。アメリカで見かけるような金髪ゴールドヘアーではなく、日本でもたびたび見れる茶髪ブラウンヘアーだ。

アメリカ人のような紳士的な格好良さを持たない彼は、口の周りに薄く髭が生えている。服装も、白地のシャツに、ところどころ擦り切れたズボン。

背もたれを倒すことの出来る大きなイスに寝転がりながら、うたた寝をしていると、突然に電話が鳴り響く。

「うおっ！？　なんだなんだいきなり」

隣の机に置いてあった電話から、近所迷惑にならないか心配なほどの大音量が鳴り響く。

閉じかかったまぶたを開き、ジョンは電話の受話器を掴む。

「もしもし？」

受話器の先にいる人物へ話しかける。すぐに応答は返ってきた。

「ジョン、仕事ランチの話だ」

とても低い声の男だった。ジョンの上司にあたる人物である。

仕事ランチとは、ルビのような意味ではない。回線を傍受傍受された時のための暗号のような物だ。

「仕事ツスか」

ジョンは嫌そうな表情を浮かべるが、相手には見えない。ゆえに、どんどん話は進む。

「そう、仕事だ。とある政治家をぶつ殺サンデーしてほしい」

「政治家か？」

「ああ、そうだ。内容は後で届く書類を確認しろ」

ジョンは、心底嫌そうな顔で受話器を置いた。

楽しい楽しいパーティーへの招待状（後書き）

昔っから考えてた物語です。

しかし、戦闘シーンばかり頭に浮かべ、結局のところ主人公が何者なのか考えてなかったたので、せつかくの機会ですので考えました。主人公の名前と特徴は、友達と遊んでた時に考えた名前だったりします

スニーキングキラー（前書き）

殺し屋と言っても、よく見かけるスナイパーではなく
自ら忍びこんで、おおごと大事にはせず、証拠を残さず仕留める
いわば、スニーキング方式です

サブレッサーをサブプレッサーと書いてしまいましたので、修正しました。

スニーキングキラー

夜のストリートにて、ジョンはカバンをぶら下げて歩いていた。なんてことはない、よく見かけるカバンだ。

ただっ広い敷居の真ん中に、これまた大きな屋敷がある。そこが本日の仕事場だ。

ジョンは、顔の半分近くを埋めるゴーグルを装着し、ゴーグルから伸びるマイクを掴み、口に近づける。次に、カバンから衣服を取り出す。防具のような強度を持ち、動きやすさを追求した結果、内側にゴムで出来た：装甲を指先を覆うまで着け、腕以外の外側をやや厚い布で補強した。

一応、これでもハンドガン程度の銃撃ならかすり傷も付けることなく防ぐことが可能だ。

ゴーグル、というよりもゴーグル付属の、耳に着けたイヤホンから声がした。

『着いたか、ジョン』

上司の声だ。

いつもよりも抑えがちな声に、ジョンはいつもの声の大きさを答える。

「ああ、着いたよ。しかし、ここから見る限り、警備が多いみたいだね」

『予告されたからな』

「なぜっ!？」

シリアスモードをぶち壊し、上司はきっぱりと答えた。

冷や汗をたらし、マイクに向かって小声で怒鳴る。

「なにしてんだよ!! こちとら、見つかったら死ぬかどうかの瀬戸際なんだぞ!？」

『そんなこと、俺はしない。依頼主だ』

「は? 依頼主が?」

少し、頭の整理をする。だいたい、依頼主っていうのは社会的な立場を守るために殺し屋を使う。だが、わざわざ危険を冒してまで予告などするものだろうか。

マイクを掴み、こういう風に返答すればいいか迷っているジョンに、上司はいつもより低い声で告げる。

『俺たちの間じゃ、一番たちの悪い依頼主だ。スニーキングキラー。聞いたことくらいはあるだろ？』

「たしか、仕事の障害を増やして、標的ゲストと殺し屋俺たちが慌てるのを見て楽しむ。とっても迷惑なギャラリーだな」

『その通り。まあ、警備してる奴らのやる気は皆無だろう。標的を見してみな』

現代風な封筒の中に、一枚の写真が入っていた。見るからに極悪そうな顔をした小太りの男が写っている。

ジョンは、ゴーグルごしに写真を凝視する。

「スペクター・マルニクス。悪い噂の絶えない政治家だな」

『そうだ。そして、巷に広がっている噂は、全て真実だ』

「自分の敵になりそうな政治家を暗殺した、というのモカ？」

『ああ。これ以上はアメリカの信用に関わる』

ジョンは写真を封筒に戻し、カバンに押し込む。次にケースを取り出し、開いた。

中には猟銃、消音付きハンドガン。そして、替えの弾薬だった。

特に迷うこともなくハンドガンを手にする。弾薬を取り出し、腰のベルトに付いているポーチへと入れる。ハンドガンは、ベルトに挟んだ。

夜空の月を眺め、独り言のように呟く。

「あー、ダルい」

イヤホンの奥で苦笑するような声が聞こえた。

ジョンは、カバンを置いたまま走り出し、屋敷の裏口から侵入した。

スニークンゲキラー（後書き）

殺し屋よりも、暗殺者が正しかったかも知れませんが、ここからスニークンゲの始まりです

パーティーの参加者（前書き）

我慢出来ずに三部目を投稿

弱きを守り、悪をくじく。

殺し屋のジョン、参上つかまつった！

これもサブプレッサーと書いていたので修正しました。

パーティーの参加者

裏口の扉を開け、辺りを確認する。

暗くて分かりづらいが、周りにはオープンや、包丁のたぐいが並べられており、見た目から調理場だとジョンは推測した。

あいにく、料理の良い匂いは漂ってこなかったが、他の臭いを感じた。

（警備か……？）

とつさにテーブルの陰に隠れる。革靴のような足音が響く。

二、いや三人か。話し声まで聞こえてきた。かなり近い。

「ほほう。殺し屋もなかなか度胸があるな」

どうやら予告のことについて話しているらしい。

テーブルの陰に隠れながら、イヤホンを外し、聞き耳を立てる。

一瞬の物音すら許されない状況下でも、ジョンは冷静に行動する。

「殺してくれるなら助かるよ。税金を取るだけ取って、我が物顔でふんぞり返るあいつには腹が立ってんだ」

テーブルから顔を出し、ゴーグルに付いているボタンを押す。すると、一気に視界が開け、暗くて見えなかった物まで見えるようになった。

暗視ゴーグルの機能だ。温度センサーの機能も付いており、もう一度ボタンを押せば、人間の位置を確認出来る。

調理場の入り口の前を、二人の男が通り過ぎて行った。まだ安堵のため息はつかない。

巡回タイプならば、またここを通るかも知れないのだ。出た途端に折り返してきたら困る。

こういう役職柄、どうしても慎重派になってしまふ。見つければ殺されるかもしれない。そんな緊張感が駆け抜けた。

何度もやってきた事なのに、なかなか慣れない。しかし、慣れてしまえば、わざわざ危険に向かって飛び込むかもしれないのだ。

固唾^{かたす}を飲み、足音が聞こえなくなるのを待っていると、複数の銃声が聞こえた。

（バレたか！？）

ジョンはとつさにテーブルに顔を戻す。

バレた？ そんなことはありえない。そもそも、見つかつてすらないのだ。そして、ここにいることは知らされていない。

監視カメラも疑ったが、暗視ゴーグルでくまなく探しても、カメラの類^{たぐい}は見つからない。

恐る恐る顔を出し、入り口を見る。

そこには、顔の無くなった警備員が転がっていた。

心臓の鼓動が早くなる。息もつまり、荒くなる。

さんざん人を殺してきたジョンだったが、あそこまで醜^{みにく}い死体は作ったことが無かった。どれも、頭を打ち抜くか、心臓を打ち抜くかの二択。

まさか、顔ごと吹き飛ばすなんて。

肉片が飛び散る中、一人の警備員が入り口の前に座り込んだ。顔は恐怖で歪み、涙をポタポタと流している。手には拳銃が握られていたが、発砲するのも忘れていたようだ。

「つまらないなあ」

変声期前の子供のような高い声が聞こえた途端、警備員の首が切り落とされた。

首から血が噴水のように噴き出し、天井すら真っ赤に染める。警備員の死体は無残な姿で残っていた。

「いるんだろ？」

また聞こえた。子供の声は、間違いなくジョンを指している。本能的にそう感じた。

だが、それだけで姿を晒すほどジョンはバカではない。極力、相手の情報を得てから先手を決める。

もう一度覗こうとした時、ジョンの頭上から何か重い物が落ちるような音がした。

いや、頭上というよりも、テーブルの上にだ。

「見つけた」

ジョンはテーブルを蹴り、受け身も考えず飛んだ。そして、さっきまでジョンのいた場所に複数の斬り傷が出来る。

「くそっ！　なんだいったい！！」

「君と同じ、殺し屋だよ」

暗視ゴーグルに映った光景は、テーブルの上に立つ中学生ぐらいの男の子だった。

しかし、両手にはおかしな物が握られていた。左手には、刀身が曲線を描くように曲がった剣と、右手にはショットガンを小型化したような銃を持っていた。

男の子はショットガンをこちらに向ける。

「いい感じにはじけるかな」

命の危機を察するのに時間はいらなかった。銃口から逃げるように横へ飛ぶと、ジョンがいた場所に小規模のクレーターが出来た。

「うーん、ショットガンにサプレッサーはさすがにダメだね。出が遅くなっちゃうよ」

「何者だ」

腰のハンドガンを引き抜き、銃口を男の子に向ける。しかし、男の子はおどけた様子で答えた。

「言っただろう？ 君と同じ殺し屋だよ」

パーティーの参加者（後書き）

さて、ここから俺の妄想劇（中2病）の始まりです
ショットガンと謎の剣を携えた少年がジョンに襲いかかる！

ってか、早速見つかってるな

無線機能（エンタージャンプ）阻害能力（アウターヒア）（前書き）

スリーキング始まるとか言っておきながら、いきなり戦闘すみませ
ん

無線機能（エンタージャンプ） 阻害能力（アウターヒアー）

「くだらねえ」

ジョンは吐き捨てるように言うと、コンマ一秒の早さで眉間に狙いをつける。そして、引き金を二度引いた。

一度目は誘導だ。首を横に振る。または避けるというアクションをさせるための一撃。

二発目は避けるのを想定したうえでの一撃。これは別に外そうがどうということはない。そして、なによりもこの次のアクションに意味がある。

「危ないじゃないか」

男の子は一発目を、体を横に倒すように避けた。だが、そこは二発目を放った位置。

ちょうど、眉間の位置だった。即死は免れ^{まぬが}ない。これで勝負は決した。

ハズだった。

男の子は横に倒した体を回転させ、サーカスの劇団員のように宙に飛んだ。髪をかすめた銃弾が壁にぶつかり、はじかれる。

次に、警報が鳴り始めた。

状況に気づいたのだらう。ショットガンを、サプレッサー付きと言っても発砲すれば、かなり大きな音になる。

しかし、そんな中、ジョンは空中を回転し、今まさにテーブルに着地しようとしている男の子に向けて、引き金を引いた。さすがに空中で避けることは出来ないはずだ。

だが

男の子はテーブルに剣を突き刺し、着地点をずらした。

銃弾は剣にはじかれ、あさつての方向に飛んでいく。

男の子は剣を引き抜き、仮面の口を端から端まで引き裂いたような笑みを浮かべる。

「生半可な攻撃じゃ、僕に当たらないよ」

挑発しているかのようにテンポのある声を発する。ジョンは舌打ちをしながら、ハンドガンを構える。

「その身体能力、どこで身につけた？」

「運動能力を上げる実験の被験者なんだよ、僕」

「そんな実験があるのか。俺もやってみたいな」

ハンドガンをいつでも放てるように構えながら、男の子を警戒する。しかし、相手はなんの構えも取らず、ただジョンを見つめていた。

男の子は引き裂いた笑みを無表情に戻し、ショットガンの銃口をこちらに向けた。

ジョンは避ける準備を済ませ、いつ撃つのかと予測を立てていた。だが、男の子が撃つことは無かった。沈黙を打ち破るように男の子が声を出す。

「本当に、似てないね」

切なそうな声で話しかける男の子に、ジョンはとげのある口調で答える。

「なにが、だ」

「君のお父さんだよ」

ジョンは頭の中で『お父さん』というワードに検索をかける。出てくるのは本当の父親ではなく、殺し屋だった。

（なぜ、こいつが父さんを知っている？）

「その顔は、疑問の表情だね」

「当たり前だ。お前みたいなガキが、どうして父さんのことをいや、どうして俺が息子ということを知っている？」

「あの人の情報なら調べ尽くした。行方不明扱いになっている理由が知れたかった。そしたら、君が出てきた」

イヤホンを取り付け、上司の回線につなげる。相手の情報を得ようとしての行動だ。

だが、流れるのはノイズばかりで、肝心の『声』が聞こえない。苛立ちを覚えていると、男の子はジョンのゴーグルに指を指す。

「この辺りに、無線機能エンタージャンプを阻害する電波が漂っている。僕じゃない誰かだ。一度、僕も試してみたけど、つながらなかった」

ジョンを舌打ちし、意識を男の子に向ける。今は危害を加える気は無いだろうが、結局、この子をスルーして任務を遂行することは出来ない。

ハンドガンの握り具合を確認し、先手を打つための作戦を練る。冷や汗をたらし、機会をうかがっていると、イヤホンのノイズが消えた。

（つながったか？）

しかし、入ってきた声は期待していた物とは違った。

『はぁーい！ 殺し屋さぁん』

「ッ！！」

無線を傍受されたのか、聞き慣れない男の声が、かんだか甲高く耳に響く。ふと見ると、男の子も疑問の表情をしていた。

耳を見れば、ジョンと同じくイヤホンが着いているのが分かった。「くそっ、無線を傍受された！？ ありえない。他の回線に切り替えても繋がらないのに！！」

取り乱す男の子を無視したのか、はたまた聞こえていないのか、無線を傍受した男は続ける。

『面白いことになってるよ。周りを見てよ。警備がドンドンそっち

に向かつてる』

明らかに笑いを含んだ声にジョンは舌打ちをする。確かに、複数の足音がこつちに向かつてきていた。

『警備は更に嚴重になるよ。なにせ、頭の無くなった人形が落ちてるからね』

「見えてるな、お前」

『もちろんだよ。このためだけに君たちを呼んだんだから』

見えているハズが無い。ここに監視カメラは無いのだ。廊下にカメラがあつて、死体しか見えていないとしても、タイミングが良すぎる。

警報が鳴った直後、なんて。

「お前、まさか警報をッ!!」

『そうでもしなきゃあ、つまらないだろう?』

男の子は、どこにいるかも分からない声に向かつて叫ぶ。

「ぶっ殺してやる!! スニークキラー!!」

『そうだね。今回はゴミを標的にしたけど、今度は私を狙ってくれたまえ』

バカ笑いがイヤホンから響く。イラついたようにジョンと男の子はイヤホンを外した。

入り口からライトが照らされた。

「そこにいるのは誰だ!?!」

警備の視線は、死体に行かないように泳いでいた。

男の子は、先ほどのような裂けた笑みを浮かべ、ショットガンと剣を構える。

「標的を先に殺すのは僕だ」

そして、ライトで照らしている警備の心臓を剣で貫き、調理場か

ら出て行った。

ジョンも釣られて出て行く。血に染まった廊下とは反対方向を進んで行った。

『さて、先に殺すのはどっちかな』

無線機能（エンタージャンプ）阻害能力（アウターヒア）（後書き）

さて、次から本当にスニーキングしますよ！

死神と呼ばれた少年（前書き）

グダグダな展開ですが、どうぞお楽しみください

死神と呼ばれた少年

いたるところから、声にならない絶叫や、乾いた銃声が鳴り響いている。

恐らく、先ほどの男の子だろう。警備連中は男の子の事を、予告してきた殺し屋と勘違いしているらしい。結構、奥まで進んできたが、人が一人もいない。

「にしても広いな。ホワイトハウスぐらいありそうだ」

外観だけで予測したホワイトハウスの広さと、この屋敷の広さを比べてみた。工作上、悪人でない限りジョンに仕事は回ってこない。ホワイトハウスに悪人と呼べる人物はいなかったため、ホワイトハウスに侵入したことが無いのだ。

銃声と絶叫という、この屋敷のBGMにしては不釣り合いなセクションを奏でている男の子に、少し同情心が湧いてきたジョンだったが、自分を殺しに来たような奴に抱く感情ではないと、即座に頭を切り替えた。

視界に映る光景から、どう進むか考える。

今ジョンがいる場所は、やや広いロビーのど真ん中に、二階へとつながる階段が設置されている部屋の、階段のわきだ。

この部屋を明るくしているのは、豪華というには照明の弱い、ろうそくを点けるタイプのシャンデリアのみである。天井にシャンデリアをつなげているロープは一本だけで、本当に大丈夫なのか疑わしいところである。

「さて、どうする？」

思案顔になる。うかつに飛び出して見つければ、男の子の仲間と思われ、即座に『蜂の巣』にされてしまうだろう。殺し屋が殺される、なんて失態、組織は末代まで笑い通すだろう。

それだけは避けなくてはならない。なによりも、ジョンのプライドが許さない。そして、死んでも笑いのネタにだけはされたくない、

という羞恥心である。

（ほとんどが、あいつを捕まえに行っているはずだ。なら、ここでシャンデリアを落としても出てくる警備なんてたかが知れてる）

単なる憶測だった。しかし、やってみる価値がありそうだとジョンは考える。

殺し屋の勘だ。^{イメージ}そして、ジョンは周りの状況を把握すること、そこから先どうなるか予測できるのが得意である。その特技をうまく使い、苦難を乗り越えてきた。

悪く言えば、思いついたらすぐ実行するタイプだ。

ジョンは右手でハンドガンを構え、シャンデリアを唯一つなげているロープに向かって引き金を引いた。

ロープのど真ん中を弾丸が貫き、見事に引きちぎれた。シャンデリアは、重力に従って落ちていく。

そして、砕けたシャンデリアは

真っ赤に燃えた。

「あれれ？」

ろうそくを点けるタイプ、ということも忘れ、真っ赤に燃え盛るシャンデリアを呆然と見つめているジョン。もちろん、シャンデリアが落ちる音のせいで少ない警備も異変に気づく。

「やっべ、やべえ！！」

さて、ここで訂正させてもらおう。彼は、これから先どうなるか予測するのが得意ではない。ただ、周りの状況を把握したうえで、勘で動いているだけなのだ。

急いで階段を駆け上がり、二階へと上がる。そこには、階段は無

かったが、三階への通路が見えた。

一階からは複数の人間の声が聞こえた。焦っているように聞こえるあたり、シャンドリアの火を消そうとしているのだろう。時間稼ぎには充分だったが、これで視界は一気に暗くなる。

ゴーグル越しに見える世界が暗闇に閉ざされたのを確認すると、ゴーグルのボタンを押し、暗視ゴーグルを起動する。もう一度ボタンを押して、温度センサーも出し、警備員を探す。

（一階に五人。消しているのが三人。ライトを照らして俺を探しているのが二人だな）

そして、二階を見渡す。

（二階に警備はいないか）

ホッとしたのも束の間、三階の通路から騒音が響き渡ってきた。

顔の向きをずらし、三階の通路へ向ける。そこには大勢の人間が確認できた。しかし、急激に温度が下がる個体がいくつかある。熱を持つている何かが飛び散る様子も見えた。

激しく動きまわり、一つだけ温度が高い個体を見つけた。おそらく、男の子だろう。

右手のショットガンを使わず、左手の剣を片手で振り回しながら、両手の指では数えきれない人数の警備員を仕留めていた。

その血なまぐさい光景を眺めていると、耳に着けたイヤホンから声が入る。

『ようやくつながったか。聞こえるか？ ジョンよ』

忘れようにも忘れられない声の低さを持つ、ジョンの上司だった。さつき無線を傍受した男だったらどうしようかと抱いた不安が消えていく。

冷静さを取り戻したジョンは、状況を報告する。

「今、殺し屋と名乗る中学生ぐらいの男の子に出会った。そして、片手で剣と小型のショットガンを扱っており、その剣だけで数人の

警備を倒している」

『そんなまさか』

信じられないのも当然だろう。子供だとか大人だとかの問題ではない。人間で出来るスペックを超えてしまっている。

淡々と語ったジョンだが、実のところ自分の目を疑っている。しかし、目の前の光景を真実と受け止める判断材料は、すでに揃っているのだ。

まず、気配も感じさせず、数メートルある入り口からテーブルまで、一瞬で来た。

そして、ジョンと別れたあとに響いたあれほどの銃声の中で、男の子は無傷である。

ジョンは記憶を戻した中で、男の子の言った気になるワードを上司に質問した。

「なあ。運動能力をあげる実験つて、上司は知ってるか？」

『ああ？ たしか、国が秘密裏に行ってた実験だろ？ 被験者の子供を多額で引き取り、薬品漬けにした。最終的に研究者は全員、即死の状態で見えられ、国によってその実験は無かったことにされた』

「目の前の男の子は、その被験者だ」

『なんだって？』

上司は、驚いた声ではなく、軽く質問するような調子で聞き返す。「まず、人間の動きじゃない。人の首を寸断できるような代物を、中学生の男の子が、小型とはいえショットガンを持ちながら振り回せるわけが無い」

誰の物か分からない腕が、ジョンの目の前に落ちる。しかし、ジョンは気にも止めず上司の質問に答える。

「そして、体を横に傾けながらジャンプし、俺の銃弾の射程に剣を突き刺すなんて芸等、誰ができる？」

言っている言葉の意味は、逆に説明口調すぎて伝わりにくかったが、ジョンが殺し屋になってから付き合ってきた上司には理解でき

たようだ。

深くため息をつき、間を開けて上司は答える。

『ロウ、か』

「ろっ?」

上司は一言つぶやき、黙りこむ。

特に口出しもせず、ジョンが無言で待っていると、上司は歯切れが悪い口調で説明する。

『コードネームだ。昔、そいつは両親に、金欲しさに売られた。毎日が吐き気の連続だったらしい』

「待て、どうしてそれをアンタが知ってんだよ」

『殺し屋グループの一つ、俺たちとは違い、任務のためならいくらでも殺す『ワールド・キル』という組織のメンバーにそいつがいた。ハッキングの得意な知り合いがいてな。ヤバそうな奴は一通りメモリーカードに入れた』

「ヤバそうな奴、そのリストにあいつがいるのか」

『そうだ。そして、お前が見ている物が真実ならば、その男の子は』
ついに悲鳴が聞こえなくなった。走り去っていく足音だけが聞こえた。

『死神のロウ。通り名だ。狙われた奴は息も出来ずに死ぬ』

生唾を飲み込む。それで、ようやく自分の喉が渴いていることに気づいた。

乾燥した舌を口の中で転がし、唾液を求める。しかし、出てくるのは少量。喋るのも億劫おっくうになるレベルだ。

「死神、ねえ。なら、俺の首が繋がってんのは、いったいどういうことだ」

『お前もプロの殺し屋だろ。ロウ相手に銃口を向けることが出来た

時点で、お前も普通の人間にできるスペックを超えてらあ」

「そうか。なら、いっちょ死神でも相手にしてくるかな」

「おいおい、標的以外は殺さない。それが俺たち組織のルールだろ？」

「大丈夫さ。とても平和的だ」

徐々にジョンの顔が歪み始める。笑顔というには、あまりにも遠い顔である。

まるで、鬼のような。

「どっちが先に殺せるか、競争するだけだよ」

死神と呼ばれた少年（後書き）

ええ、そうですね。いきなりスニキング失敗しましたね。
というか、前々回から失敗してますね。

お前、本当にプロの殺し屋か？

という感じで、他の殺し屋組織のことも出してみました。

次回は、ロウ視点です。

感想やレビューお待ちしております！

コードネーム・ロウ（前書き）

ここからロウ視点になります

コードネーム：ロウ

ロウの通った道は真つ赤に染まっていた。

数多^{あまた}の警備を殺し、数少ない服が血まみれになっている。だが、すでに慣れてしまっているロウには、嫌悪感はなく、むしろ自分にフィットしていると感じていた。

柄^えまで血がこべりついている剣を握りしめ、ショットガンの装填^{そうてん}を、口を使って行う。

カチン、という歯が合わさった、小気味の良い音を確認したのち、ショットガンを構える。

（今更、ショットガンにサプレッサーは必要ねえな。問題は、ショットガンをどう節約するか、だが……）

ショットガンは、威力が大きいかわりに弾丸も大きいという性質がある。その分、撃てる弾は少なくなってしまうがちだ。先ほどの通路では、あまりの数にショットガンを装填する時間も無く、仕方なく剣だけで戦っていた。

おかげでこの有り様だ。

突如、ロウの頭にハンマーで叩いたような激痛が訪れる。

「ぐ、あがつ……！　ち、くしょう……」

運動能力強化の研究での薬の副作用である。腕や足、反射神経から筋肉まで全てをフル稼働していたため、脳に反動が帰ってきたのだ。

（痛みが、日に日に増してきてやがる……）

目尻に涙を浮かべ、波のように連続でやって来る激痛に体が揺らぐ。ついに足を床につかせ、座り込んでしまった。

頭を抱え、呻く。

どれだけ時間が経ったのか。そんなことは分らないが、間違いない分かることはあった。

（足音……、くそ、もう増援が来やがった……）

無理に体を起こし、剣を構える。

ロウは、この湾曲した剣だけでも、あれほどの人数は一瞬で片付けることが出来る。だが、体にかかる負担を軽減するためにショットガンを持ち歩いていた。

なぜハンドガンにしないのか。それは、彼に射撃の腕が無いからだ。それ以外の理由はない。おおざっぱな狙いでも当てることの出来るショットガンは、ロウにとっては相棒と呼べるだろう。あまりにもしつくりと来すぎて、すぐに引き金を引いてしまうのが玉に瑕だが。

殺し屋になろうとしたのも、『ワールド・キル』に身体能力の才能を買われ、親への復讐の手伝いをするという条件だったからである。

がむしやらに仕事をしていくうちに、いつの間にか『死神のロウ』などという通り名が出来てしまった。

隠れて殺す、なんてことをしない彼にとっては、なるべくしてなった言葉なんだろうと自覚していた。

未だに両親は見つからない。

（早く、親あ見つけないと、体が保たねえ……）

脂汗が頬を伝う。

足音は迫ってきていた。数では大したことは無いだろうが、今のロウにとってはかなりキツイ。

扉が見え、ショットガンを構えながら中に入る。

（誰も……、いないか）

広い部屋だった。見るからに豪華な装飾と、赤と金で色づけされたカーペットから横長のイスまで。ちり一つ落ちてないのを見れば、つい最近まで人がいたのが確認できる。

開けた扉の、陰になる位置に座り込む。誰か入ってきてても先手を取れるようにだ。

「広えなちくしょう。しかも、やけに人数が多いと来たもんだ」
殺してきた警備は、調理場の入り口にいた二人が最初だった。それから、ざっと三十人は殺している。

いや、もしかしたら、それ以上かもしれない。

（邪魔者は消すだけだ……。ジョンも、邪魔になりそうなら殺す。たとえ、あの人の息子だろうと）

疲れて意識が薄くなっているロウは、昔、と言っても数年前の出来事を思い出していた。

<<<・・・。

ロウは、毎日のようにわけの分からない薬を飲まされ、体が拒否反応を起こしては吐くという毎日を送っていた。

ついには胃液しか出ないこともあり、喉が焼けるように痛い時もあった。それでも薬を飲まされ、ただでさえただれた喉を更に刺激し、意識を失いかけるほどの激痛を起こした。

さすがにそんな日々だ。自殺する人間は山ほどいた。目を覚ましたら同居していた子供が首を吊っていた、なんて日常会話にしているほど普通なことだった。

そして、ロウにも限界が訪れた。

（死にたい。毎日毎日。もう嫌だ）

みんなが死ぬために使っていたロープを持ち出し、パイプに取り付ける。目を閉じて、笑顔でロープに顔を近づける。

（天国じゃあ、美味しい物が食べたいなあ）

踏み台にしていた机を蹴ろうとした時、近くの部屋から爆音が響いた。驚いた口ウは、焦りと不安で机から飛び降り、状況を確認する。

あたりには、灰色の噴煙と、もともとは人間だったであろう肉塊が散らばっていた。白い切れ端が見え、一目で肉塊が研究者だと分かった。

口を開けたまま放心する。噴煙が薄れてきた時、尻餅をついている研究者が、噴煙が流れてくる方に指を差す。

「あ、あ、ああ……！！」

開けた口が元に戻らないようだ。研究者の舌だけが空回りしており、言葉を発しようとしているのは理解できた。

そして、その研究者の舌が吹き飛んだ。

吹き飛んだ、といっても、舌だけがキレイに無くなっていた。研究者は口から血を吹き出し、喉を抑えて呻いていた。

「コヒュツ、コ、ヒューヒュー……」

空気がすり抜ける音しかない。舌が根元まで無くなったのだろう。息が出来ずに苦しんでいる。しかし、そんなことを勉強していない口ウには分らない。

ただ、なぜかそこにいたかった。

研究者が涙を浮かべながら、口ウに手を伸ばす。口ウはそれを黙

って見つめた。

「お似合いだ」

研究者の伸ばした手が踏みつけられた。見れば、ガタイの良い男が、拳銃とナイフを持ち、立っていた。

研究者は、絶望の眼差しを男に向ける。男は黙って研究者の頭に向かって拳銃の引き金を引いた。

マグナム並みの威力が頭を貫き、研究者の頭がまるで叩きつけたスイカのように破裂する。男は唾を吐き、拳銃をリロードする。

「デメエらみてえな奴らは、そういう無様な死に方がお似合いだ」
不思議にも、ロウに恐怖感は無かった。むしろ安堵感が強かった。ロウの存在に気づいた男は、ロウの頭を撫でた。

ロウは、疲れきった生気の無い瞳を精一杯見開き、男の目を見た。
「ねえ、おじちゃん。おじちゃんは、誰なの？」

「うん、俺か？ 俺はなあ、悪い人を地獄に送って、良い子を天国に導く人だよ」

「じゃあ、天使様なんだね！」

「ちよつと違うかな」

男はさっきのような人殺しの顔を止め、温和で人畜無害な笑顔を浮かべて言った。

「おじちゃんは、どちらかと言うと、死神さんかな」

<<<・・・

そして、ロウの前から離れたあの男は、そこにいた研究者全てを殺し、行方不明になった。いや、すでに死亡しているだろう、とロウは薄々感じていた。

恩人に対して不謹慎と思われるかもしれないが、殺し屋というの

は殺し殺されの世界だ。昨日まで味方だった人間にナイフを突きつけられるなんて日常茶飯事。

その後は、助けられたのは良かったが、行くアテも無く、同じく親に売られた子供たちと路地裏でひっそりと生活していた。

ロウは拳にキツく握りしめ、眉をひそめる。

（必ずだ。この身体能力は、神様がくれたチャンスなんだ。復讐を果たすためのチャンス。あの人とまた会うためのチャンス）

ロウの身体能力強化は、事件が終わった後に現れてきた。スカウトされたのも、ひとえにこれのおかげである。

ようやく意識が鮮明になってきた。痛みも消えており、立ち上がって部屋を探索する。すると、隣から声が聞こえた。

『ほう。しかし、さすがの殺し屋もこの数は相手に出来ないだろう』

『いえいえ。殺し屋というのは、殺すことが仕事です。気をつけた方がよろしいですよ』

『いらぬ心配だ。ガーハツハツ!!』

警備ではないだろう。これだけ大きな事態になっていて、まだ大笑い出来るなら生粋のバカだ。

つまり、隣にいるのは標的の可能性が高い。

（だけど、もう一人は誰だ？）

『君の会社に助けてもらっているんだ。死ぬわけがない！又ハハハ』

『嬉しいお言葉です。では、そろそろ戻ります。さようなら』

『おう!』

扉を開ける音がした。先ほどの片方が出たのだろう。助けてもらっている、と言った人物はまだ部屋の中。つまり、

（……標的、か）

舌なめずりをし、扉を開ける。警備はそのまま通り過ぎていったようで、足音はしなかった。

真っ直ぐに隣の扉に向かい、ドアノブへ手を伸ばす。

「チェックメイトだ」

コードネーム：ロウ（後書き）

長々と書いてしまいましたが、いかがだったでしょうか。

死神は死神に命を救われ、自分を売った悪魔を探す。

彼はまだ救われませんね。復讐が終わっても、待っているのは虚無感だけです。

彼に平穩のハッピーエンドをあげたいです。

感想やレビュー、お待ちしております！

物語の道化師へピエロ〈たち〉（前書き）

とりあえず、これで物語の基盤は出来てきたかなー、みたいなところ
です

物語の道化師《ピエロ》たち

ドアノブを勢いよく開け、ショットガンを構える。
しかし、見えた光景は意外なものだった。

「ようやくご到着かよつまんねえ」

ジョンだった。

小太りしている悪人面の男の眉間に銃口を突きつけ、勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。

悪人面の男――標的は顔中に冷や汗が流れており、腕が小刻みに震えていた。

ロウはショットガンを構えたまま、ジョンに顔を向ける。

「デメエ、僕より先にどうして来れた？」

「簡単さ。ちよいと、先回りしただけのことよ」

ふと見れば、標的の後ろの窓が少し開いていた。おそらく、あの窓から侵入したのだろう。

その様子を見ていた標的が声を震わせながら言う。

「なん、で殺し屋が、ふ、二人!？」

「あア？」

まあ、疑問に思わなくてもないだろう。わざわざ二人も用意する必要はない。

ジョンは標的に眉間から銃口を離さず、ゴーグルを上げて、顔を見れるようにする。

あの人と同じ、とても殺し屋とは思えない目だった。

「つつーことはあれか。予告は一つしか無かったと」

ジョンがひらめいたように声をあげる。

「二人、聞いてないぞ!! 予告では、予告ではツツツ!!」

「知るかよ。まあ、一人だったとしても、お前が死ぬことには、そ

う変わりは無かったがな」

それだけ言うと、ジヨンは戸惑いもためらいもなく、射撃訓練のような気軽さで引き金を引いた。

標的の頭を弾丸が貫き、数滴の血液と、粉々になった頭蓋骨のいくつかが飛び散った。

ジヨンはマイクを口に近づける。

「標的の死亡を確認。今すぐ戻る」

ジヨンは窓に足をかけ、そこから離れようとする。

だが、ロウはそれ引き止めた。

「僕を忘れてんじゃねエ！！ なんの断りもなくぶっ殺しやがって。テメエらの組織ってなあ、譲るっていうステキな言葉も知らねえのか？」

「あいにく、お前らのような奴らにくれてやる手柄なんぞ、持ち合わせていねえって話だ」

そして、ジヨンは窓にフックを引っ掛けると、そのまま降りて行った。少し経ち、フックが外れると走り去る音だけが外から聞こえた。

ロウは舌打ちし、無線で本部へとつなげる。

「聞こえるか？ ロウだ。もう一人の殺し屋に先を超された」

『ほほう。二重殺しに、クロスミツシヨン スリーキングキラ、目的無視とは、依頼主はよほどの遊び人に見受ける』

「笑ってんじゃねえぞ。その首、180度回してやろうか」

『おー怖。ピエロっていうのは笑わせるためにいるんでしょ？』

「ハッ！ 自分しか笑わせねえピエロが、なに言ってるやがる」

無線の奥から、バカにしたような笑いが聞こえ、更に苛立つ。

そんなことにも気づかず、相手は笑いを含んだまま説明をする。

『まあ、あなたの話を聞く限りだと、間違いなく依頼主に遊ばれましたね』

「そオカよ。僕からしたら、あのジヨンって奴の方が、もっと遊び

人に見えるぜ」

『と、言つと?』

「僕を相手にして、鼻で笑いながら逃げやがった」

また大笑いしている声が聞こえた。

「笑いごとじゃねえ。いくらあの人のサバイバル技術を教わったからといって、運動能力の強化された僕と互角だぞ」

『そうですか。天賦の才でもあるんでしょう。まあ、後片付けは下っ端にやらせますから、任務失敗の報告して、ボスに怒られなさい』

「……、ワールド・キル。テメエらはどこまで世界を殺せる?」

『はい?』

「テメエらの計画のための殺し屋組織同士の戦いになれば、半数以上があつた男に殺されるぞ。それで、本当に世界を殺せるのか?」

『今はまだ、その時期じゃありません。世界を殺すにはまだ、やり残したことが山ほどありますゆえ』

「そうかい。まあ、せいぜいビビって任務で命落とさないよお、しつかり掴んどけクソ野郎」

そして無線を切った。

ジョンが去つていった窓を見つめていると、ふいに声をかけられた。

「いやあ、見事でした」

「……、」

この部屋の出入り口普及に、真っ黒なスーツに、赤のネクタイの男がいた。

声はどこかで聞いたことのあるものだった。そして、口調も。

怪訝な眼差しで見つめる口ウをなだめるように、男は手を振る。

「任務を依頼したものですよ」

「通信障害もテメエが原因か」

「いかにも、そうだと。一度、ゆっくりとお話したかったので」
「ハシヤくなよオッサン。寿命を一気に縮めてほしいのか?」

男は、まるで仮面を貼り付けたように薄っぺらい愛想笑いを浮かべる。

ロウはショットガンの銃口を男に向ける。しかし、男は微動だにしない。

「ただの余興ですよ。物語の始まりにしては、なかなかの創作小説コメディストーリーでしょう?」

「どこかのピエロ並みに笑えねえジョークだ」
迷わず引き金を引いた。

発射された弾丸がはじけ、中から無数の塵ちりが、男を貫こうとする。しかし、

男に当たる直前で、全て弾き返された。

「なにっ!?!」

「なにもないですよ。ただ、あなたがた以外にも、殺し屋を雇っているということ以外は、ね」

物語の道化師へピエロ《たち》（後書き）

すでにリアルじゃなくなってきたけど、まあこんな感じが続きます
次回は、ジョン視点に戻るかな？
もう少し口ウを続けるかな？

感想お待ちしております

「国の敵を排除する（エネミー＝カントリーアウト）」（前書き）

読み返したら、果てしなく超展開だったことに気づきました。

いきなり殺し屋と戦いかよ……

こんなので、見てくだされば嬉しいです

「国の敵を排除する（エネミー＝カントリーアウト）」

ロウの放ったショットガンの弾丸は、全てスニーキングキラーの目の前で散り散りにはじけた。

不思議な光景に頭が回らないロウだったが、視線を軽く動かすと、スニーキングキラーが歪んだ。

歪んだ、というよりも蜃気楼のような感じだ。しかし、間違いないロウの前に立っている。

舌打ちをしながら辺りを見回す。どこか、仕掛けでも無いか探しているのだ。すると、一筋の線が見えた。

（あれが、タネか）

ショットガンを手放し、剣に神経を集中させる。迷わず剣を振り上げ、その線に向かって振り下ろした。

ハズだった。

振り上げた腕が、振り下ろせないのだ。何か強い力に引っ張られるように、左腕から複数の細い圧迫感がある。

視線だけを振り上げた左腕に向かわせる。すると、先ほど見えた線が左腕に絡みついていた。緑やら赤やら、明るい色を見る限り、糸のような物なのだろう。

（そんなこと分析してる場合じゃねえ。さっさと振りほどかないと）

「あちゃー。そんなに急いじゃ、腕が逝っちゃっよ？」

背後から気配がこみ上げた。言い知れぬ圧迫感は、左腕だけでなく、背筋までもを硬直させる。

耳だけを声の方向に集中させる。

「アラミド繊維せんいって知ってる？ まあ、簡単に言えば硬いんだけどね」

「その声、どこかで……」

ロウはとっさに声を出した。あまりにも聞き慣れた声だったからだ。しかし、味方でもなければ、敵でもない。敵は全員、いや、とある男を除いて全て殺している。

この状況を察したロウは相手に自己紹介もさせずに、考察したことを口に出す。

「スニーキングギラーの雇った殺し屋ってなア、テメエのことか？」

「大正解っ」

茶目っ気のある、まだ幼い声の持ち主だ。世間一般で言う少女のような、高い未成熟の声だろう。

ロウからすれば、それは耳障りな声に聞こえる。案の定、ロウにとって、その声の主は嫌いな人物だ。

「ルカッケリオン、だな？ あの研究の被験者での生存者」

「あら、覚えててくれたの？ 嬉しいな」

舌打ちし、線を無理矢理に引きちぎる。解放された左腕を軽く振ると、血が飛び散った。見れば、左腕にたくさん傷が付いていた。

ロウはルカを睨みつけ、ショットガンの銃口を向ける。

「なんでテメエがここにいる」

「国が秘密裏に公認してる殺し屋組織、って言えば分かるかな」

国、つまりアメリカの経済や政治、国際的な問題になりそうな人物を消すための機関があるのは噂でたびたび聞いていた。

しかし、知っている人間が殺し屋なんて、若いロウには不愉快に

しか思えなかった。

「『一国の敵を排除する《エネミー》カントリーアウト》」、か。カルト宗教みてえな組織に入りやがって」

「あら、いっちょまえに心配してくれんの？ 昔はイジワルばかりしてたくせに」

「さて、そろそろお喋りは止めようか」

会話、と言ってもルカが一方的に話しかけていたみたいな物だが、スニーキングキラーは二人を制止させる。

スニーキングキラーは笑いながら拍手をし、胸のポケットから小さなノートのような物を取り出した。ちょうど、手乗りサイズだ。その表紙には、こう書いてある。

「国より、ここの内容は全て受理されるものである」

つまり、国が殺人をしても良いという判断を下したのだ。なぜかを問うまえにスニーキングキラーは口を開く。

「君たちの組織はブラックリストの真上に上がってるんだよ」

「それがどうした」

国にすら敵視されて、それでも「それがどうした」で済ませられる口ウの器量にも問題があるが、今はそこではない。

その会話にルカは横やりを入れる。

「つまり、あんたは国から直々に殺されんのよ」

「ハッ、ワールド・キルも舐められたもんだな」

「舐める、ねえ。舐めるには味が薄すぎるわよ。世界を殺す前に、国に殺されなさい――」

一瞬と言える時間の中、床に複数の亀裂が駆け抜けた。

チェーンソーを回転させているような刃物らしい音をたて、その亀裂は真っ直ぐロウへと向かってくる。

それをロウは剣を人風ぎし、消した。伸ばしきったギターの弦が切れる音と共に。

「僕を斬りたいなら、もっと鋭利なものを使えよ」

「なら、違う方法で行くわよ」

次に、部屋のイスから机までがロウへと飛んできた。

ロウはその場で体を回し、剣を振り回す。飛んできたイスや机は全てロウには当たらず、壁に叩きつけられた。

「ひゅー、さすがに能力強化された人間は違うね。あたしの攻撃じやあ、一つも届かないや」

「笑えねえな」

手放したショットガンを蹴り上げ、右手で掴む。特に狙いも定めずにスニーキングキラーに向けて引き金を引いた。

だが、全て目の前ではじかれる。

「見えた」

そしてロウはショットガンの反動をもとめせず、スニーキングキラーめがけて飛んだ。

「薄い壁だなア、オイッツツ!!」

剣を振り下ろし、ショットガンすらも弾き返した壁を寸断する。

開けた視界の先で、スニーキングキラーは不適に笑みを浮かべていた。

「なにを笑ってやがる!!」

「ははは、本当に君の言う通りだ。笑えねえ」

剣を横になぎ払い、スニーキングキラーを真っ二つにするために力を込める。

しかし、渾身の一撃は届かない。

スニーキングキラーは足を一つも動かさず、ロウの攻撃が当たる

直前で空中に浮いた。

「机やイスまでもが飛んだんだ。私に細工してないわけが無いだろう」

「そーいうことよ」

いつの間にか背後に来ていたル力を視界に確認する前に、ル力の蹴りが脇腹に向けて放たれる。無抵抗なまま飛んでいき壁に叩きつけられた。

頭を打ちつけ、意識が薄れかけるのを自覚すると、舌を嚙んででも意識を取り戻す。

立ち上がり、剣を構える。

「吠えてんじゃねえぞ、格下アアアアアアアアアア！」

瞳孔を開き目を鬼のように変えたロウは、壁にひびを入れるほどの勢いで蹴飛ばし、ル力に向かって飛んだ。

「格下？ 残念だけど、私も能力強化されてんのよ！！」

すると、いつの間に仕掛けていたのか、足元の糸を踏みつける。

部屋中に地震と思えるほどの振動が響き渡り、張り巡らせた糸が震える。隙間なく埋められた震える糸はノコギリのように部屋中を切り裂き、かまいたちのような現象を生み出した。

もちろん、そんな中にいたんじゃあロウはただでは済まない。

ロウの手足にできた細い切り傷から大量の血を吹き出し、宙に五秒ほど停止していた。ロウはゆっくりと落ちていき、倒れる。

「もつと楽しませてよ。死神はこんなもんなの？」

ル力は高笑いをしたまま、ロウに近づく。そして、背中を踏みつける。

だが、倒れたロウはル力の足をつかみ、立ち上がった。

「きゃっ！？」

いきなり足を持ち上げられたル力は床に倒れこむ。薄く笑みを浮かべ、ル力を軽く投げた。ル力は反対側の壁にぶつかり、大の字になった。ロウは高速で走り寄り、ル力の顎めがけてアッパーを決める。

「かはっ……」

空気を不意に吐き出す音と共に、ル力は天井に衝突した。がれきが崩れ、噴煙が舞う。

間髪入れずに、ロウは崩れた天井に向かってショットガンを連射した。計三発。崩れたせいで落ちてきた上の階の机やイスが落ちてくるが、ショットガンによって、全て粉々になった。

スニーキングキラーは、その様子を興味深そうに見つめる。

「これは面白いな。キレた子供の大喧嘩なんてなかなか見れるものじゃない」

勝敗は決した。ロウの勝利だろう。

相手がまともな人間ならば。

「きゃはははっ！！ たつのしいねえ！！」

天井から声が聞こえた。まだ、ル力は生きている。

真っ黒なもので崩れた天井は覆われており、ショットガンはそれに埋もれる形で止まっていた。

ショットガンの弾丸は全て、それに止められたのだ。

「糸ぐれえでショットガン止めた？」

「さすがに無いわよ。ちょっとばかり鉄を混ぜてもらったけど」

崩れ落ちた天井のがれきが全て、ロウに向かって、弾丸のごとく飛んできく。

身を傾け、全て避けるが、まだ攻撃は終わらない。天井から降りてきたル力は一本の線を踏みつける。すると、張り巡らされた糸が全て、ロウに向かって、障害物を粉々にするほどの力で横から迫ってきた。

「……ッ」

剣を軽く振り、迫ってきた線を切る。ギターの弦が切れる音がした。

ロウは糸を一本だけ掴み、力の限りに引っ張った。

「ぐおらあああああああつ!!」

張り巡らされた線が次々に切れていく。壁が剥がれたり、床が没落したりと、すでに部屋の原型をとどめていなかった。廃屋のような有り様だ。

「あちゃー、それをやらちゃあダメだわ」

「さつさと消える。テメエの出番は終わった。ここから立ち去るか、僕に肉の塊にされるか選べ」

「悪いけど、どちらも選ばないよ」

ル力は千切れた線の一本を手に取り、引っ張る。すると、他の千切れた線も持ち上がった。

扉が砕けた。どういう風にしたかは分からないが、全て千切れたはずの線は、扉だけが砕けたのだ。

「外にも張ってあるのよ」

そして、ル力はスニーキングキラーを引っ張り、扉だった場所から部屋を出た。

「待ちやがれ!!」

ロウが駆け寄るが、ルカとスニーキングキラーは砕けた扉から消えた。ロウも追いかけて、部屋から出るがどこにもいなかった。

「ちくしょう。研究の被験者で僕以外に発症した奴がいるなんてな

……」

「国の敵を排除する（エネミー＝カントリーアウト）」（後書き）

なんかもう、意味不明のオンパレードですね
文章力がほしい……

三大勢力に交わる巨大な組織（前書き）

えっ？前の話の最後、ルカが逃げ出したのが矛盾してるって？

ば、ばばば馬鹿め！　ああああ、あれは伏線さ！

三大勢力に交わる巨大な組織

ルカとスニーキングキラーは、夜の闇に溶け込むほど黒い車に乗り、高速道路を走っていた。

内装は後部座席が二つあり、向かい合わせになるように置かれている。ルカとスニーキングキラーは隣には座らず、二つの座席を使い、向かい合わせに座っていた。

スニーキングキラーは疑問の表情を浮かべて、ずっと黙り込んでいたルカに話しかける。

「君は、どちらも選ばないと言ったね」

「ん？」

ボーっとしていたのか、反応が気薄な様子でルカは返事をした。

「うん。強化された人間ってね、頭の回転とか反射神経が普通の人間より早くなるのよ。だけど、その早さの代わりに、二つ同時には考えられなくなる」

「二つ同時？　と言うと」

「ええ、つまりはね。選ばない、とはどういうことを考えて、次に私が逃げ出すのを見たじゃない？　もしかしたら、逃げたのは罠かもと考えて、次に本当に逃げるのかも考える。次に、言葉の意味と矛盾してることに気づく。色んな可能性が空回りして、動きが止まるのよ」

「なるほど。じゃあ、もし逃げ出すと言っていたら？」

「先回りされて真つ二つかな」

ルカはサラッとトンでもないことを言った。スニーキングキラーは小さく身震いするが、ルカは気づかずに話し続ける。

「もし、強化された人間と戦うのなら無数の可能性を目の当たりにさせないといけないわけよ。まあ、考える気もなく、突撃してきたなら分らないけどね」

「ほう。なかなか参考になった」

ポケットから手帳を取り出し、軽く手に入れた情報を書きなぐる。ル力は「なにに使うのか」と言いたげな顔をしたが、すぐに口う対策だと浮かんだのか、表情を無に戻す。

街中が放つネオンの光に目を細めながら、スニーキングキラーは携帯を取り出す。小さな電子音の後に、携帯を耳に当てた。

「……そうだ。アームストロングだ」

アームストロング、その単語でル力は目だけをスニーキングキラーに向けた。どうやら、スニーキングキラーの名前はアームストロングと言っらしい。

（アームストロング？ たしか、どこかで……）

記憶に検索をかけて、アームストロングというワードを探す。しかし、コメディアニメが真っ先に出てしまった。もう一度、深く検索をかけると頭に染み渡るように情報が浮かび上がってきた。

（アームストロング！ たしか、アメリカを支えている企業の一つだった気がするわ。にしても、どうしてそんなのが殺し屋なんかを）
「ああ、そうだ。仕込みはすでに終わってる。あとはあいつらが真っ赤に染まりやあ、アメリカの半分以上は私にひれ伏すに決まっている」

やけにデカい声だな、という感想を漏らさずに話を聞いていた。いや、雰囲気は話を「聞かせている」というのが近いだろうか。

ネオンライトもほとんど見えなくなってきた。場所は、あまり使われていない古びた山で、ル力達「カントリー」エネミーアウト」の中継基地だ。

使われていないにしては綺麗に舗装された道路を、真っ黒な車が走り抜ける。都会のネオンライトも届かない場所だけに辺りは真っ暗。炭を浸したように黒く染まった視界を、車から発せられる二つの光だけが前方を照らしていた。

「幽霊でも出そうだな」

スニーキングキラー、もといアームストロングがジョークのつもりだろうか、ル力にとっては洒落にならないことを言い出した。

今度はルカが大きく身震いをした。冷や汗が溢れだし、目は小刻みに泳いでいた。

「おっと、幽霊は苦手だったかな」

「そ、そそそんなわけないじゃない……」

しかし、一向に視界は集中しない。目を閉じたら怖がっているように見られるかも、というプライドで目を開けているが、結局怖がっているのがバレバレである。

車窓から、車から発している光とは違う淡い光が差したのを知ると、ルカは顔を窓に向けた。

（た、助かったよお……）

安堵のため息をつく。

やがて、淡い光がルカの横顔を全面に照らし出すと、車は停まった。

「ふー、やっと着いた」

二階建てのログハウスだ。アナログなアンテナが屋根から突き出ており、あまり使われてなさそうな雰囲気醸し出していた。

「アナログだねえ」

アームストロングは、説明の通りの感想を漏らした。

「カムフラージュって奴ですよ。あなたのお迎えが来るまで休んでいてくださいな」

「殺し屋とは思えないほどの接客テクニクだね。まあ、優しい心遣いは大切にさせてもらいますよ」

「上に命令されてるだけよ。本当なら、野宿でもさせてるところだわ」

皮肉のつもりだろうが、アームストロングは聞いてもいないような顔だった。

会話が終わると、後ろからタキシードを着て、黒いサングラスをかけた運転手が大きめなカバンを二つ持ってきた。片方はルカの仕事の金だろう。

（もう一つ、ありゃあなんなの）

先にログハウスへ入ろうとしている運転手を呼び止めた。

「ちよつと！ そのカバン、何が入ってるの？」

「カバン、ですか？ そりゃ、ルカ様の仕事金と。えーっと、何でしょう、これ」

タキシードでサングラスという、イカツい要素を足したような風体をしている男にしては弱々しい声を発する運転手に、ルカは気強く声を上げる。

「何でしょう、じゃないわよ！ 正体の分かんない物を持ち込んでんじゃない！」

「それは私の荷物だ」

アームストロングが会話に横やりを入れた途端に、気弱な運転手のカバンを自ら持った。ポカンとした顔の運転手が、少し遅れて頭を下げる。

「さて、案内してくれよ。客に優しい殺し屋さん」

「は、はあ」

……。

「んで、スニーキングキラーが招待してくれたパーティーはどうだった？」

電話から地の底のように低い声が聞こえてきた。

ジョンは任務を済ませて、自分の部屋で仮眠を取ろうとしていた。もちろん、帰ってきた直後に見計らったようなコールが鳴り響き、今、彼はボサボサの髪を更に跳ねさせて受話器を掴んでいる。

上司の笑いが込められた言葉に、サラリーマンの残業並みの労働をさせられたジョンはかなりイライラしていた。

「無線機の傍受に、警報を無駄に鳴らす。更に殺し屋をもう一人雇ってただあ？ 最高のメンツじゃねえか」

「そうか。そりゃあ楽しいパーティーだったんだろうな」

「楽しすぎて、「ワールド・キル」に喧嘩売っちゃったよ」

「はア!?!」

上司はいつもの低い声とは思えない、高い悲鳴をあげた。

それを聞いたジョンは腹を抱えて大笑いする。

「で、テメエ!! いらねえ置きみやげしやがつて!!」

「スニーキンググライダーなんか掴ませたお前が悪いんだよバアカ!!」

最後に受話器に向かって怒声を放つと、投げ捨てるように受話器を置いた。

「くそつ、気晴らしに買い物でも行くかな」

ジョンは、安い皮のジャケットを着て、ジーンズも履き、軽くて平べったい財布を持って扉を開けた。

三大勢力に交わる巨大な組織（後書き）

なんか、やっとジョンが出ましたね。

つか、周りのキャラが自己主張でかすぎですね

キャラクター&組織を解説（前書き）

ここでは、今まで出たキャラクターなどを解説します。

キャラクター&組織を解説

組織「パートナー」

ジョンが所属する殺し屋組織。人数は少数で、暗殺を請け負う。世間や裏で悪さをする人間の暗殺のみ扱っており、正義のヒーローと呼ぶ者もいる。しかし、選り好みのしすぎで貧困ぎみなため、武器も安物ばかりしか無い。

メンバー

・ジョン

幼いころに両親に捨てられた青年。殺し屋に拾われ、生き残るためにサバイバル技術を身につかされた。

グロイ物に耐性が無いが、極度に緊張していたりテンションが上がっていると迷わず引き金を引く。

身体能力もかなり高く、おおざっぱに言うと、助走をつければ天井を多少走れる

・上司（名前不明）

声が異常に低い上司。それ以外の情報なし

「ワールド・キル」

殺しを堂々とやってのける殺し屋組織。表の舞台に名前が挙がることもあり、一番に危険視されている。

殺し屋以外にも、怪盗と名乗る者もいたりする。名前の通り、世界を殺すことを最終目的にしているが、動機は不明。

メンバー

・ロウ

幼いころ、ジョンとは違い、両親によって研究材料として売られた少年。

自殺しようとしてる最中、タイミングよくジョンを拾った殺し屋が現れる。

それ以来、探し続けているが、その殺し屋が死んでいることを知らず、行方不明扱いになっていると思いついでいる。

両親に復讐しようとも考えており、そちらの情報も探している。

・ピエロ

ロウの上司にあたる人物。

殺しはしないが、ワールド・キルにいる。

「国の敵を排除する（カントリー＝エネミーアウト）」

国が公認している殺し屋組織

国が必要としなくなった人材や、他国との戦争の引き金になりそうな人物を殺す。

派手に動いても国が口止めするため、かなり大胆な殺し方をする者が多い。

メンバー

・ルカ・ケリオン

糸を張り巡らせて戦う殺し屋。ロウと同じく研究材料として両親に売られたが、特に今は気にしていない。

ロウにいじめられた恨みがある。

アームストロングに雇われた殺し屋。

キャラクター&組織を解説（後書き）

一章が終わったので、次は二章です。

日本からの訪問者（前書き）

これから、第二章です。

一章と言っても、二巻みたいなモンですけどね。

日本からの訪問者

ジョンは、仕事の金を受け取ろうと銀行に向かっていた。

裏で手に入れた汚れた金だ。ATMなんかじゃあ信用ならない、と上司が強く勧めてきたため、ジョンはしぶしぶながらに銀行に通っている。

徒歩で四十分の位置にある銀行へようやくたどり着いた。白と赤が壁に塗りたくられているのを見ると、病院と錯覚さくかくしそうになる。ここら辺では一番大きい銀行だけに、人の数の多さもさることながら、窓口の多さも他の中小銀行とは比べものにならない。

ジョンは、受付のお姉さんに通帳を渡し、今入っている金額を教えてもらう。

「えーっと。百万ドルになりますね」

不審な顔をする受付のお姉さんを差し置いて、全て引き出すと言ったジョンは、待ち人用のソファに座る。両腕を背もたれの後ろに回し、口笛を軽く吹かしながら時間を持て余していた。

（きつちり百万ドル。スニーキングキラーは邪魔だったが、一応は金を払うんだな）

昔のジャズシンガーの曲を軽やかに吹きながら、昨晚のことを思い出す。

スニーキングキラーを仕掛けてきた謎の男。殺し屋を名乗り、ジョンの父親を知る少年。

（どうしてアイツは、行方不明なんて言ったんだ？ 親父なら、とくに死んでしまっているハズだ。死に顔だって見た）

父親の葬式の日。どこかの宗教だろうか、十字架の首輪を着けたスキンヘッドの神父が、ジョンの父親の顔に花を置いた。それから、慈いつくしむように周りの殺し屋の先輩のみんなが歌い始めた。

ジョンは、もうずっと無表情だった。冷酷だとか、大人だとかではない。まだ子供だったのだ。父親の死を受け入れられず、生きて

いると頭の中で思い込んでいたのだ。

葬式が終わったあとの、ジョーン一人きりになった部屋で一晩中泣いた。唯一の親が死んだ、その悲しみがジョンの胸にのしかかった（ああ、そうだよ。殺し屋が殺されたんだ。大笑いしてやるべきだったかな）

殺し屋が殺される、なんて笑い事だろう。だが、笑う者はいなかった。それほど、父親は信頼され愛されていた。

殺し屋なのに、愛されていた。

なんとなく、記憶を今だけ消し去るようにジョンは天井を見上げる。一面が真っ白な世界があり、一瞬、上を向いていることを忘れるようになった。

携帯を取り出し、時間を確認した。時刻は午前7時40分。もうみんな起き始めている時間だろう。一晩中走り回っていたジョンには、朝は起床して晩は眠るという、それだけのことさえ出来ていない。そのおかげか、体内時計が狂ってしまった。一秒が早かったり、遅かったり、正常な時が無い。

携帯を畳む。すると、くぐもったような、マスクで塞がれているよう怒鳴り声が聞こえた。

「動くんじゃねえ！！ 動いたら、全員皆殺しだ！！」

聞き慣れた悪役のセリフを吐きながら、数人の筋肉質の男たちが、サングラスとマスクという重装備をして受付に吠えている。

（なんだよ。もう花粉の時期か？）

頭の中がお花畑のような考えを浮かべた。しかし、辺りの緊張感からそんな生易しい想像の通りではないことを悟る。

「いいか、金だ！ 金、このバッグに入るだけの金を入れやがれ！」

どうやら、銀行強盗らしい。

金色の拳銃を、先ほどジョンの受付をしてくれたお姉さんに向けている。

（ありゃあ、ターミネーターが使ってた拳銃。なかなか良いモン持ってるんだなあ）

大きく欠伸をした。特に気にもしてなさそうな、アホのツラで。運命は皮肉なものだ。欠伸をしたものだから、苛立っている強盗の一人がこちらにやってきた。

「テメエ、欠伸なんかしやがって！！　ぶっ殺されてえのか！？」
「はい？」

まさか欠伸で怒られるとは、というふざけた顔が引き金だったのか、目の前で怒り寸前の強盗は怒声を張り上げる。

「ふざけやがってえ！！　ぶっ殺す！！」

強盗は拳銃をこちらに向けた。手は震えており、上下に震えているあたり撃ったことが無い小心者のようだ。

ジョンは、その強盗の足首を蹴飛ばす。不意の攻撃になすすべもなく、強盗は膝をついて、ちょうどジョンに頭を下げる体制になった。

「んーしょっと」

蹴り飛ばした足を上に上げ、強盗の顎を蹴り上げる。そのまま仰向けに倒れた。

その光景に周りほどよめき始める。

まず第一声をあげたのは、受付のお姉さんを脅していた強盗だった。

「バカが！！」

黄金に輝く銃口をこちらに向けた。引き金は迷いなく、放たれる。（うーん、アイツには惜しい代物だな）

首を横に倒し、弾丸をかわす。後ろにあった観葉植物の葉を貫いたのを確認すると、ジョンは立ち上がった。

「て、テメエ。やるつてのか！？」

「おいおい、物騒なことは止めるよ。めんどくさいぜ？」

ジョンはそのまま歩み寄ってくる。ギャラリーのひそひそ話を無視して、ジョンは。

ジョンはその二つを、しゃがむことによって回避した。ショーウインドウと言うのだろうか、内装を見せるためにガラスの壁だ。それにひびを付けて、二つの弾丸は停止した。

「くっ、あぁっ!？」

強盗の一人がおかしな声を上げた。どうやら、リロードの際に、急ぎすぎて弾丸を逆向きに入れてしまい、詰まってしまったらしい。拳銃を振ったりして、直そうと必死になっている。

ジョンは一言、「アホか」とだけ言うと、その強盗の襟首を掴んで、固まっているもう片方の強盗に投げつけた。

「弱いな」

「ブラボーブラボー」

いきなり拍手の音が聞こえ、とつさに振り向く。受付のお姉さんに交渉してた男だ。

「面白いね。君も入るかい？」

「なんのことだよ」

「スモールマニー。小銭も集まれば大金になる」

「日本のことわざでも参考にしたのか？」

「ふん、君には理解できないらしいな。この世界、札束なんかよりも小銭の方が利用価値があることに」

「それで？」

「いちいち癪しやに障る奴だな。吠え面かいてもしらねえぞ!!」

スモールマニーが拳銃を構えた。ろくな標準もつけられていない銃口は、首の真横をすり抜ける位置にある。

（惜しいな、コイツ。ただ、経験の差だ）

引き金がゆっくりと引かれる。

ジョンはスモールマニーに向かって走り出した。

「死にやがれええええええええ!!!!」

「待ちなさい！！」

両者の動きが止まった。

声のした方向を見ると、白いＴシャツを着ており、胸が張り裂けんばかりに押し出されていたセクシーな体型だった。そんな体系とは違い、気弱そうな顔の女が銀行の入り口前に立っていた。

拳銃をこちらに向けているが、震えすぎて銃口がこちらに向いていない。

「ぎ、ぎぎぎ銀行強盗！！　ここここ、この日向美紀ひなた みきがお縄をちょうだいする！！」

なまったような英語を震えさせながら、女は叫んだ。

そして、目を瞑ったままこちらに突進してくる。ギャラリーだけでなく、ジョンやスモールマニーも固まっていた。

「でえいやああああああああああああ！！」

勢いは良かったのだが、倒れている銀行強盗につまづき、無様に床に伏せた。すぐに起き上がり、鼻をさする。

「くうく、イテテ。よくもやってくれたな！？」

「なんにもしてねえよ！！」

スモールマニーは大声で言い返した。

理不尽な責任の転嫁てんかを見せつけられた、とジョンは感想を漏らす。スモールマニーは銃口をその日向美紀という女に向けた。

日向は銃口を見つめたまま動かない。いや、動けないのだろう。

頭が状況に追いついていないのだ。

危険を察したジョンは、スモールマニーの拳銃を掴んだ腕を締め上げる。

銃声が連続で鳴り響き、天井から先端の潰れた弾丸がいくつか落ちてきた。

「あれ？　あ、うわわわ」

自分がどんな状況に置かれていたのかようやく理解した日向は、ポケットから何か取り出した。

（あれは、手錠か？）

リングが鎖で繋がれている、典型的な手錠だった。日向はそれを締め上げていない片方の腕に取り付けた。そして、自分の腕にも付けて、腰に手をあてて大きく鼻息を吹いた。

「よ、よおし！ やっと手に入れた手柄です！」

「なんだ、コイツ」

「あ、先ほどは助けていただき……ってあれ？」

日向は下げようとしたままの姿勢で顔だけを上げて、ジョンを凝視してきた。

「もしかしてアナタはっ……！」

（も、もしかして殺し屋ってことがバレた！？）

「アメリカの刑事ですか！？」

「はア？」

日向は胸ポケットから黒い手帳を取り出した。真ん中には金色の花のようなマークが描かれている。

誇らしげに見せてくる日向は、大きく息を吸い込むと――

「東京地区警察の日向美紀でありまふッッ……！」

と、絶叫に近いほどの大声で舌を噛んだ。

もちろん、その後に本当の絶叫が銀行の外にまで響いた。

日本からの訪問者（後書き）

しょうがないじゃないですか。ジョンの格好って、昔の刑事ドラマに出てくるような格好ですもの。

女の子の刑事さんです
ドジっ娘です

ケリー「バイオレント（前書き）」

殺し屋の話なのにハードボイルドでもないし
更に殺伐ともしてない話です。

ケリーⅡバイオレント

後ろを、まるで影のようについてくる日向にジョンは居心地というものが悪かった。全身から緊張感のようなオーラが出ている気がしているし、なによりもこの光景が他人からどう見えるのか心配だった。

日向の格好はＴシャツという薄着。しかも巨乳ときたものだ。顔は大人しそうでこんな格好するようには見えないので不審に思うだろう。そんな格好で後ろにぴたりついてきているのは、客観的に見れば間違いを起こしたようにしか見えない。

（いいから隣で愛想良くしてくれよ！ 視線が怖いんだよ！！）

思い過ぎしだとジョンは思ったが、三十代ぐらいの女性集団がこちらを見た後にひそひそ話を始めたのを見て、露骨に肩を落とした。

不意に、日向が背伸びをしながらジョンの肩を叩いた。日本人からすれば、アメリカ人の背とはまるで巨人なのだろう。もともと日向の背が低いのもあるのだろうが。

「あのお、警察署ってどこにあるんでしょうか」

その言葉で落ちていた肩が急上昇する。ビクッと跳ねた肩に驚いて、日向は小さく「きゃっ」と悲鳴をあげた。日向からすれば何気ない質問なのだろうが、ジョンからすれば死の宣告である。

なにしろ、あの後の良い返事が出来ず、刑事と勘違いされたままなのだ。今思えば自衛隊とか言っておけば回避出来たのかも知れない。

（警察署なんて殺し屋の俺が知るかよ！）

心の中で毒づいたが、答えないわけにもいかなないのでカクカクとした動作で振り返った。

「え、えっとね。うん、警察署？ 分かってるけどちょっと待って」

「分かりました」

聞き心地の良い素直な返事を真つ向から浴びて、ジョンは回れ右をした。急いでポケットから携帯を取り出しGPSの機能を起動する。位置情報を送信している待ち時間にイライラしながら警察署を探した。ようやく警察署を見つけて、日向に何も見てない風体を装うために暗記する。グワッと目を見開いて凝視し、うろ覚えで場所を記憶した。

焦りながら日向へ向き直った。キョトンとした顔をしている日向に、ジョンは回らない舌で伝える。

「あそこの角を右に曲がつ」

「ダアアアアアアリイイイインツツ！」

「ふぐおつ！？」

背中に重たい衝撃がぶつかり、押されるがままに地面に突つ伏した。

「な、
なんなんだ!？」

「ケリー!! バイオレントよ! あなたの彼女!」

高らかに発せられた声に頭だけを向けた。化粧一つしていない綺麗な顔がアップで見えている。青く澄んだ瞳はアメリカ人の特徴である。

「ケリー！？ て、デメエ真つ昼間からなにをしてやがんだ！？」

「ああん、冷たいわよダーリンっ」

甘ったるい口調で答えたケリーの肩を急いで掴み持ち上げる。上半身が見えた。このままモデルになれそうなプロポーズをしており、胸も日向より大きいのが見てとれる。

こんな美女に抱きつかれたら、普通の一般男性なら歓喜するだろう。しかし、ジョンの事情だけは違った。

「病院はどうした！ この国一番の名医がなにしてんだ！？」

「休みに決まってるじゃない？ それより、この子なに？」

いきなり会話のベクトルを変えてきたジヨンは、『この子』に当てはまる唯一の女性に視線を移す。

その日向はオロオロした顔で二人を見下ろしては周りを伺っていた。

「え、えっとこれは痴漢！？ いやでも知り合いみたいだし……」

「痴漢だから捕まえてくれ」

ジョンは即座に切り捨てた。

……。

「へえ、昔は兵士たちの手当てや武器の弾薬などを作っていたんですか」

「やけに説明口調なうえに『昔』っていうのがイラっとしたけど、ここは我慢しておいてあげるわ」

小洒落たレストランに立ち寄り、三人は談笑していた。談笑というにはピリピリした雰囲気だが。

「あたしはこれでも二十代で、ジョンと同年なのよ？ 昔、というよりは最近までの方が合ってるわ」

「我慢できてねえじゃねえか」

「なにか言った？」

声から一瞬、殺意のようなものが感じ取れてジョンは身震いした。慌てて両手を振って弁明する。

「な、何も言っただけです！」

「それならいいわ。さて、あたしの自己紹介は終わったから、次はアナタとジョンの関係を言いなさい」

「ジョンさんが責務をこなしているところに鉢合わせしまして、拙いながらに手を貸させてもらいました！」

「えっ！？」

ケリーは目を見開いて驚きの声をあげた。ジョンの耳に口を寄せ、小声で話し出す。

（ま、まさかダーリン。殺しをしているのをあの子に手伝わせたの？）

（んなわけねえだろ！　ウザかった強盗犯を倒したら、ちょうどあいつが）

（あー、なるほど。にしても、強盗犯の前に進んで対峙するなんて、また殺し屋らしくないことしちゃって）

（そのせいで刑事と勘違いされてんだよ。犯人を引き渡した後も着いてきて困ってんの）

「どうかしました？」

日向が首をかしげている。

ジョンが返事するまえにケリーが前に出た。

「どうもしてないわ。それよりも、アナタの自己紹介の続きを」

「そうでしたね。日向美紀という名前で、日本では刑事をしています。とある怪盗がアメリカににいるという情報を得て参りました」

「怪盗？」

「そうですね。最近では、神の見えざる手に関係する書類やデータを盗み、痕跡を堂々と残していくんです！　姿はピエロ。二つの巨大なハサミを掲げて、マントを翻しながら宙を舞う！　大怪盗です！」

「はあ。んで、その大怪盗を捕まえに来たアナタが、どうして銀行なんかに？」

「実は、迷子になりました」

「迷子お？」

「お恥ずかしながらです。そして、これまた恥ずかしいことに銀行を市役所と間違えまして……」

「まあ、なまっただ英語なんか使ってるんだから間違えそうよね」

「うう……。これでも、一度は大きな事件を解決した経歴があるんですよ？　でもまあ運が良かっただけですけど」

「とにかく、その警察署にアナタを連れていけばいいのね？　あたしが連れてってやるわよ」

「ほ、ほんとですか！？」

「おい、ケリー」

「ん？」

今まで会話に入ってこなかったジョンが肘でケリーをつついた。

（やけに聞き分けが良いじゃないか。他人なんかを助けるような奴じゃないだろ？）

（さつさと警察に預けたらダーリンとデート出来るでしょ？）

（そういう魂胆か……。お前とデートなんかしねえぞ）

（こんなナイスバディとベッドインしたくないの？ ほら、ここだって好きにさせ）

（バカやめろ。ストーカーなんかと付き合うつもりはない）

スカートの裾を掴んだケリーの手をジョンは制した。ケリーは残念そうな顔を見ると、イスから立ち上がる。

「さて、迷子の子猫ちゃんにお家を教えてあげましょうかしら」

ケリー「バイオレント（後書き）」

神の見えざる手というのは、たしか国全体の資産だったと思います。
（うる覚え）

国民の財産や会社の貯金、国の予算までを含めたものとか、どうとか。

そんなものを怪盗はどうするつもりなんだろうね。
にしても、

日向「ストーカー」

ケリー「ストーカー」

ストーカー多いな……

感想などお待ちしております！

通る道全て闇「ロード・ダークネス」(前書き)

前回のストーリーカー人物訂正

ロウもストーリーカーでした

通る道全て闇「ロード・ダークネス」

ケリーがタクシーを捕まえて助手席に座り、運転手に行き先を言う。それと同時に運転手はカーナビをいじる。日向が物珍しげに車内を見回した。

「日本とあまり変わらないんですね」

「それもそうだろう。タクシーのデザインっていうのはだいたいどの国も同じだ。車自体も右ハンドルか左ハンドルかの違いしか無いしな」

レディファーストをするつもりでジョンは日向に先に入るよう勧めた。日向はもじもじしながらもそれに従い、「すみません……」と照れたように頭を下げて後部座席に座った。

助手席ですでに座っていたケリーが小さく「レディファーストなんてしてくれたことないのに」と呟いたが、ジョンの耳には届かず、ジョンもタクシーに乗車してエンジンがかかった。

早々と変わっていく景色をジーツと見つめている日向にジョンは話しかける。

「どうして市役所なんか訪ねたんだ？」

「警察署の場所を教えてもらいたくて、です。でも、今思えばこうやってタクシーに乗れば良かったんですね」

助手席からケリーが慌てたように顔を出した。

「警察署に行くつもりだったの？」

「はい」

「つて、ああ……」

いきなり大声をあげてケリーは運転手の肩を叩いた。わずらわしげな表情をしながらも顔を少しだけケリーに向ける。

ケリーはカーナビを指差して言った。

「市役所じゃなくて警察署に行つてちょうだい……」

「はあ!？」

運転手も声を張り上げた。それもそのはず。いきなり進行方向を変えろと言われたのだから。

信号が赤になってタクシーが止まった。運転手は急いでカーナビに検索をかける。

「ま、真逆の方向に警察署がありますけど……」

「嘘っ！？ ああもう！ そのぶんまで払うから戻ってよ！」

信号が青になると同時にタクシーは走り出し、近くのビルを一周して警察署に続いている車道に入った。

……。

警察署に到着した。ビルを横に伸ばしたような形をしており、色とトビラの紋章以外だと普通のビルと大差ない外観をしている。

ジョンが先に降りて、ケリーと日向のドアを開ける。奇声をあげて抱きついてきたケリーを払いのけて、ジョンは財布を開けた。

「えっと、いくらですか」

「あ、待ってください」

運転手に運賃を払おうとしたジョンを止めて、日向が財布を突き出していた。

日向は自分が持つのが礼儀だ、という他人に無駄な借りを負わさない精神で動いた。わざわざここまで連れてきてくれた人にお金まで出してもらうのは気が引けたのだ。

ジョンは素直に引き下がり、日向が運転手に小銭を渡した。簡易な箱のレジに小銭を入れた運転手は、さっさと車を出した。

ふう、と気疲れたのか日向はため息を吐き出す。

「初めてのアメリカなので、ちょっと疲れました……」

大きく背伸びをして、また息を吐く。その深呼吸を何度か繰り返して日向はトビラに向かって、ぎこちなく歩き出した。

ジョンは後ろから声をかける。

「腕と足が一緒に出てるぞ」

まるで昔のロボットのように、右手と右足、左手と左足という組み合わせで交互に出していた。緊張のせいなのか知らないがまるでコメディだ。ケリーもたまらず吹き出す。

「いやあ、今時ロボットの歩き方するほど緊張する子なんて初めて見たわ」

目尻に涙を浮かべてまで笑っていた。

（そこまでおかしいか？）

ようやく声に気づいた日向は、意識するように右手と左足、左手と右足の組み合わせに戻した。しかし、ぎこちなさは消えずにケリーはまだ笑っている。

トビラの前に立った日向は自動ドアということを知らなかったのか、いきなり開いたドアに驚いていた。それを見て更にケリーは笑う。

何か思い出したように、日向は肩から頭までを後ろに向けて、ジョンを手招きした。

「ジョンさんも入らないんですかあ！？」

次にジョンも驚く。

（そういえば、まだ誤解を解いてなかったっけか）

目をパチパチとさせて疑問の顔を浮かべる日向に、ジョンはやや無理やりな笑顔で手を振った。

「俺はまだ戻らなくていいんだ！」

「そうなんですか！　じゃあ、先に入ってますね！」

手を大きく振りながら日向は警察署に入ってしまった。

さて、とジョンはケリーに話しかける。

「一件落着、だな。帰ろうぜ」

「あたし達のミスウィートホームに？」

「いいや。『お互い』の家に」

「やーん。いじわる」

背を向けたジョンにケリーが突進の容量で抱きついてくるが、軽く横にかわす。顔面から地に直撃したケリーをスルーして、ジョンはビルの一隅へと姿を消した。

……。

ロウの所属する『ワールド・キル』とは、とある人物の一つの思想により創られた組織だ。その人物こそ『ワールド・キル』のボスだ。

最近創られた組織のわりに大きく、そして行うことも大きい。まず、殺し屋メンバーと諜報メンバー、そして軍事メンバーがある。

殺し屋メンバーの仕事は主に、殺しを請け負うことだ。これはボスが元は殺し屋なのが系を引いている。

次に諜報メンバーだ。世界経済や政界についてなどに探りを入れて、弱点を見つけることだ。

最後に軍事メンバー。軍人と同様の訓練をしており、普段は一般人に化けている。ヘリコプターや戦車も操ることが出来る。

この三竦みはお互いに牽制しあい、お互いを敵視している人間もいる。

殺し屋メンバーなら諜報メンバーに勝てる。しかし、軍事メンバーには勝てない。諜報メンバーは軍事メンバーに勝てる。しかし、殺し屋メンバーには勝てない、というようにバランスが保たれているのだ。

軍事メンバーに諜報メンバーが勝てる理由は、ひとえにたった一人の逸材がいるからだ。

「ロウさん。どうでした？ 任務失敗の苦い味は」

ピエロのようにバカげた衣装を身にまとっている男がいた。コー

ドネームはロード・ダークネス。諜報メンバーのリーダー格の一人だ。諜報と言っても、盗みを専門にしている。

そのからかっている口調にロウは舌打ちした。もちろん、ロウは殺し屋メンバーだ。メンバーが違えども上司は上司である。まだ幼いロウにとって上下関係というのは苦痛以外の何物でもない。

「油断してただけだ」

逃げ口上のようなセリフを吐いてしまったことに、今更ロウは後悔する。

「油断、ですか。いつ殺されるか分からない中で油断できるなんて、さすがですね。まあ、慣れる前のコーヒーのような苦味をじっくり味わってください」

皮肉じみた言葉にロウは怒りを覚える。

しかし、すぐにダークネスは話題を変えた。

「そういえば、その頭痛。どんな具合になってますか」

「ああ？ 右目あたりが特に痛くなってるが、それがどうした」

「ふふん、なんでもありません。ですが、気をつけてくださいね。その頭痛で死なないように」

「忠告のつもりか？ 頭痛で死ぬかよ」

意味深なセリフを残して、ダークネスは部屋から消えた。

通る道全て闇「ロード・ダークネス」（後書き）

実はこのロウの頭痛、リアルにある病気を参考にしてるんですが
発症方法がまるつきり違います。

ロウの場合、徐々に痛みが増してますが

そのとある病気は、いきなり激痛らしいです。

どんな病気かは、いずれ書くことになりますので、そのときまで。

その頭痛、とても怖いらしいです。

新人歓迎と顔合わせ1（前書き）

新キャラが一気に増えます

ジヨンの組織にいる人間とそれをサポートする人間が出てきます

新人歓迎と顔合わせ1

仕事の後にビールでも飲もうかと出かけたジョンに、とある婦警が絡んできた。そこから一悶着あり、ジョンは安いアパートの一室で古びた縦に長いイスを傾けながらビールをちびちびと飲んでいたら、テレビのリモコンを取り、バラエティー番組でも見ようかとしたタイミングで電話がけたたましく鳴り響く。ビールを机に置いてジョンは引き抜くほどの勢いで受話器を取った。

「もしもし？」

イラついた声は表に出さず、向こう側の人間に応答を願う。待ちもしないうちに返事はかえってきた。

「ジョン」

「上司か」

低い声に定評のある上司だった。

「さつさと支部に來い」

いきなりの呼び出しだった。ジョンは唾を飲み込んでから答える。

「どうしてだよ」

「期待の新人がご到着だ。歓迎会するぞ」

「はあ？ 歓迎会い！？ 殺し屋がやるには華やかだなおい」

「問題ない。サポートまで呼んである」

「来る女の子二人が未発達だから、別に嬉しくもないぞ」

「そう言っつなよ。未発達なのは俺も同じだしさ」

「は？」

ジョンは言葉を詰まらせた。

（なにかのジョークか？）

受話器を耳に当てたまま固まっていると、上司は先々に話を進めた。

「とにかく來い。八時までには來いよ」

そこで通話が一方的に切られた。

車の走り抜ける音だけが聞こえる部屋の真ん中でジョンはため息をつく。

タンスからまた皮のジャンパーを取り出して着る。

「唐突すぎんだよ……」

小さく愚痴をこぼしたジョンに返事をする者はいなかった。

……。

「ようやく来たねジョン！」

扉をノックした直後、目の前から一瞬にして扉が無くなった途端に一人の女の子が前に仁王立ちしていた。胸元から首まで肌が晒されている大胆な服装をしている。ふふん、と鼻をならしてジョンを見下すような視線を送ろうとしているが、背丈の関係で上目遣いになくなっていない。

この女の子の名前はプリマベラ。いや、名前というよりもコードネームだ。組織内でも本名を明かさない人間は少なくない。ジョンもその一人である。

プリマベラの頭を二、三回撫でて奥に入っていく。

「こらあ！ 無視すんなあ！！」

突如、ジョンの肩が重石を乗せられたように重くなる。首を後ろに回すとプリマベラがジョンに抱きついていていた。体格的には充分なプロポーションなのだが、胸が無い。ゆえに女性と意識したことが無いジョンは、プリマベラの両脇に両腕を通して持ち上げて、ゆっくり床に降ろしてあげる。

それが氣にくわなかったのか、プリマベラは頬を膨らませて抗議の声をあげた。

「子供扱いすんなよあ！！」

ジョンはただただプリマベラを無視して進んでいく。対してプ

リマベールも後ろからチョコチョコと着いてきながら喚いていたが、少しすると泣きそうな声になっていた。

「うう……、ジョン！ 待ってよ無視しないでよ！」

さすがに可哀想に感じたのか、ジョンは振り返った。さっきまで泣きべそをかいていたリマベールの顔が一気に明るく笑顔になる。

「ふふん！ やっぱ私が気になるのよね！」

「そんなことは無いな」

ジョンは全否定した後に一瞥いちくつをくれるとスタスタとまた歩き出した。

「こらあ！ ジョン！」

……。

「よお」

薄暗い通路の壁に腕を組んでもたれかかっているタキシードの男がいた。

「ジミア・イトウ、いやこれは偽名だったな」

「偽名だなんて関係ないさ。ここではジミア・イトウで通しているからね」

まるで他では違う名前だと言わんばかりのセリフだったが、ジョンは気にもせず話を続ける。

「どうだ？ お前のことだから、上司から先日のスニキングキラの件について話を伺ってるんだろ？」

ジョンが何かをねだるように手のひらを仰向けにして差し出す。求めているのは答えであり、ジミア・イトウはそれに返答した。

「もちろんだ。奴はアームストロングというアメリカ屈指の巨大企業」

ジミア・イトウはもたれかかっていた体を起こし、胸ポケットか

ら一切れの紙を取り出す。ジョンは歩み寄り、それを受け取った。
内容は、

「神の見えざる手？」

「そうだ。聞き覚えあるだろ？ アームストロングという名の企業を。生産会社をいくつも持ちながら、世界の株価に他多数に入れないほどのアメリカの可愛いペットさ」

「それと、神の見えざる手にどんな関係がある？」

「言っただろ？ アメリカ屈指の巨大企業だつて。世界中の中小企業なんかはほとんど手中に納めているし、大手企業だつて形無しだ。そこを狙って、一つデカいことをやる腹らしい」

「デカいこと？」

「何をするつもりかまでは掴めてねえ。ただ、黒い道アンダーブリッジから得た情報だけに信頼は五分五分つてところだ」

黒い道とは、裏の世界に生きるハッカーや殺し屋のような存在が訪れる世界の裏側である。相応する物が無ければ殺されるし、情報との釣り合いが取れていなければ信用は無くなる。リアルよりもバランスの不安定な世界だ。だからこそ、価値は五分五分。嘘なんて平気で言って金を奪って逃げていく奴もいるし、情報屋としての信用を勝ち取り大金持ちになった奴もいる。常識と法律から逸脱した空間は闇の一片にすぎない。

裏で戦ってきたジョンは黒い道を知っている。

「信じる価値はあるな」

「そうか」

ただ軽くジミア・イトウは返事した。

ジョンはただ奥に向かって歩き出し、ジミア・イトウの横を抜けていく。

抜ける直前で、小さな声でジミア・イトウは言った。
「表を支配した人間をお前ら闇はどこまで殺せるかな」

ジョンは聞いてもいなかったように歩いていく。
ジミア・イトウは「ふっ」と薄く笑うと、また腕を組んで壁にもたれかった。

……。

ところどころ錆び付いたドアに不釣り合いな『新人歓迎』と殴り書きされたハートの看板を見てジョンは顔をしかめる。

開けるのが億劫なジョンがドアの前で気まずそうに立ち尽くしていると、肩が何者かに叩かれた。

「こんにちわ、ジョン」

振り返ると、茶色つ気のある黒髪をポニーテールに結んだ少女がいた。名前は広崎奈々。世界有数の天才ハッカーとして『裏で』知られており、ジョンたちの組織のサポートを務めている。上司の言っていたハッカーとはこの広崎奈々のことだった。容姿は和風美人と呼ぶに相応しく、大和撫子と呼べるほどに一つ一つの行動が細やかだ。

（プリマベéraと同年代なのに、これだけ差があるなんてな）

落胆するようにため息を吐く。廊下のはるか遠くで大きくしゃみが聞こえた気がした。

「新人歓迎、ってどんなことするんだ？」

看板を指で差ししながらジョンは広崎に質問した。しかし、広崎は可愛らしく笑うと、唇に人差し指を当てて言った。

「ナイショですっ」

ついでにウインクときたものだ。一般男性百人に聞いても百人が可愛いと答えそうなほど可憐な笑顔を浮かべている。

（大和撫子って感じがするな。見たことないけど。日本人というのはこんなに綺麗な笑顔を浮かべられるんだろうか）

はるか東方の大地に思いを馳せていると、広崎が錆び付いたドアを開けた。中からは明るい光が差し込んでくる。

「さあ、行きましょうか」

広崎がジョンの腕を掴み引つ張った。抵抗せずにジョンは流されるまま部屋に入っていた。

新人歓迎と顔合わせ1（後書き）

ここまでで三人も

さて、どうだったでしょう？

最初はコメディ、次にシリアス、最後はジョンの妄想という流れでしたが。

感想などお待ちしております

新人歓迎と顔合わせ2（前書き）

女の子増やさないと、ね……
男だらけじゃダメなのよ……

新人歓迎と顔合わせ2

場違いな看板を取り付けられた扉を開けて入った光景は、なんとも言えない物だった。

質素なミニテーブルの上に所狭しと料理が乗せられており、テーブルを囲う椅子には二人の中年が酒を飲んでいた。顔も赤くなっているあたり、相当飲んでるのが伺える。

片方の男。染みだらけの白衣を身に纏っており、顎髭も蓄えたというよりも剃り忘れにしか見えないザラザラ感。名前はシュウ・アラミデ。科学者だ。広崎と同じくジョンの組織のサポーターの一人である。

次に、明らかに人工色を放つ銀髪の男だ。名は荒木^{あらか}大和^{やまと}。ブローカーという職業で、説明するならば依頼人と仕事人の仲介役を担う立場だ。こちらも組織のサポーターをしている。

酒臭さが充満した部屋に入った途端、ジョンは鼻をつまんだ。男の加齢臭と酒臭さだけは好きになれないのだ。

シュウが真つ黒な酒瓶を取ろうとしたとき、ようやくジョンの存在に気づいた。持っていた酒瓶を振って、しゃつくりを交えつつ陽気な調子でジョンに話しかけてきた。

「ジョン、ジョンじゃな、ヒック！ ジョンじゃないか！ ひっさしぶりヒック！ 久しぶりだなあ！！」

「久しぶりに会えたのは嬉しいけど、年頃の女の子が来るっていうのに酒なんか飲むかよ普通」

ジョンは広崎をチラツと見た。広崎はこの悪臭の中でも笑顔を浮かべて、ジョンの言葉を否定するように両手を眼前で振った。

「いえいえ、私はサポーターですので、特に文句言うつもりは無いです」

「そついう俺達もサポーターなんだが……」
隣にいた荒木があからさまに肩を落とした。

（まともなサポーターは、広崎しかないな）

ジョンが殺し屋組織の先行きを不安に感じていると、後ろのドアがいきなり開いた。壁に叩きつけられたような音でジョンは振り返る。

「ジョン！！ どうして先に行くか、くっさい！！」

プリマベールだった。入ってきた直後に怒鳴り声をあげたかと思ったら、今度は涙目で飛び出していった。

シュウと荒木は無言で広崎に頭を下げた。居心地が悪そうに広崎は「頭を上げてください」と二人に促す。

閉まりかけたドアがゆっくりと開けられた。

出てきたのは小学生の高学年ぐらいの少女だった。

「は？」

ジョンは間拔けな声を上げた。

（誰だよ、この子）

その少女は、髪は荒木と違い人工的ではない白髪で、目はアルビノなのか赤く染まっていた。服はどこかのお嬢様のような物を着込んでいた。目の下に真っ黒な筋のくまがある。

少女は薄く笑うとジョンは見上げて言った。

「遅れてすまないな。ジョン」

どこかで聞いたことのある喋り方だった。

「どうしたのかな、迷子かな？」

広崎が腰を下ろして目線を合わせる。対して少女は広崎の額ひたいにデコピンを食らわせた。

「い、痛いです……」

「まだ分からねえのか？ 俺だよ俺」

（俺？）

ジョンは何か引っかけた。しかし、その先が分からない。喉元まで出掛かっている。

少女は思案顔するジョンと広崎を待つのに耐えかねたのか声を張り上げた。

「上司の喋り方も忘れたか teme エらー!!」

ジョンは硬直した。広崎は引きつった笑顔を浮かべて立ち尽くしていた。

後ろのおっさん二人がたまらず大笑いする。

「いやあ、ジョンにも正体を明かしてないっていうのは本当だったんだな」

荒木が銀髪の頭をクシャクシャと掻きながら笑い続ける。何がなんだか分からないジョンも釣られて笑う。

「つまりあれか。あの地獄の亡者みたいな声の主が、こんなに可愛らしい女の子ってことか？ 今日はエイプリルフルだったつけ？」

「何を勘違いしてたか知らねえが、俺は間違っ事なき teme の上司だ」

「じゃあ、あの低いおっさん声はなんなんだよ？」

「ここにあるボイスチェンジャーだ。一応、俺だけが特定されないための保険さ」

上司はそう言うのとポケットからマイクの球体を取り付けたリモコンのような機械を取り出し、マイク部分に口を近づけた。「ジョン」と一言、いつもの低い声が聞こえてきた。ジョンの全身が、鳥肌が駆け抜けるような感覚を味わう。

上司は固まったままのジョンも気にせず、ポケットにボイスチェンジャーをポケットにしまって言った。

「名はボルテア」エンヴァジリン。コードネームは『ポーン指針毒殺』。毒を専門に扱い毒殺を終えた後に血液と同化し、痕跡を残さないことを主にする」

上司「――ボルテアはそれを言うと、部屋の外に手招きをした。小さく悲鳴が聞こえる。肩から徐々に体が見えてきた。青年のよう

で、まだ幼く見える。金髪の髪に、ラフな格好だった。

ボルテアは無言だった。その青年は数秒間まごごした後、ようやく口を開いた。

「名前は、えつと……、アレグザンダー・トーリアと言います。コードネームは『死鎌』^{ガイティアン}です」

深く息を吐いて、トーリアは後ずさった。しかし、ボルテアがトーリアの足を蹴飛ばしてなにやら命令を飛ばしている。「ええっ!?」と驚いたトーリアをボルテアは睨みつけた。

（まるで飼い主に飼い慣らされる前の飼い犬だな）

ジョンが苦笑すると、観念したのかトーリアがまた前に出てきた。「えつと、えつと、使う武器は刃を振動させてチェインソーのように切り裂くことの出来る鎌です、はい……」

ボルテアをそれを見て頷いた。トーリアは笑顔を浮かべたあと、ボルテアが指を差した椅子に座った。

満足げな表情をしているボルテアに、ジョンは小声で話しかけた。「いったいどういふつもりだ？ 歓迎会なんて今までやらなかっただろ」

「そうだな。確かに、今までは電話で済ませてきた。だが、あいつはプレッシャーに弱くてな」

「そんな奴がどうして殺し屋になんかなるんだよ」

「二重人格、という言葉ぐらい知ってるだろ？」

ボルテアは「二重人格」の部分だけを割り増しに小さく言った。

ジョンは頷く。

「トーリアはな、ストレスが溜まるともう一つの人格が顔を出すんだ。殺人衝動に駆られた殺人鬼がな」

「どうしてだ」

「トーリアは目の前でクラスメートが狂った殺人鬼に殺された。知ってるだろ？ 一学年児童が数名を残して殺害された悲惨な事件を」その事件は、ワシントン州とは違った場所だったが全チャンネルがその話題で持ちきりだった。児童が首を斬られ息が出来ない状態

にされたとか、腹を裂かれて生きたまま内蔵を引っ張り出されたとか、いくらグロテスクな物を笑いにしているアメリカ人でも見るに耐えない物だった。ジョンも薄く覚えている。

「その事件でな、人格が出来上がったんだよ。精神が不安定になるほどのプレッシャーとストレス、そして記憶にこべりついたグロテスクな殺害シーンの数々。ホラー映画なんて比にならないほどの非日常。奴はそんなところに一人でいたんだ」

「それとこれと、どういう関係があるんだ？」

「トリアが言うには、殺し屋を通じて自分の中に潜む殺人鬼を黙らせる方法が見つかるんじゃないか、ということらしい」

「逆に殺人鬼に体に乗っ取られるんじゃないか？」

ジョンは率直な疑問を口にした。ボルテアは首を振った。

「分からない。人の思想は十人十色だ。どれが解決策かなんて誰も知りはない。なら、一度戦ってみるべきだと考えたんだろ？」

「んで、論点もずれたからもう一度聞かせてくれ。どうしてトリアだけ歓迎会なんだ？」

「気まぐれだよ。ただ、これから苦痛と戦うトリアに、帰ってくるべき場所があることを知ってほしくてな」

ボルテアは遠くを見ているような目をした。ジョンは部屋を見る。トリアが二人のおっさんに酒を勧められ、それを必死に断っている。広崎がジュースをトリアの頭にこぼして謝っている。いつの間にか入ってきていたプリマベラがお節介にもトリアの皿に料理を盛り付けている。

ジョンは笑顔を浮かべた。

「さて、俺達もパーティーに参加するか。上司はどうする？」

「なにがだ？」

「その歳じゃ酒は飲めねえだろ。つか、どうしてその歳で殺し屋なんかに」

「聞くな」

「え？」

ボイスチェンジャーを使っていないはずなのに、低く唸るような声がした。

「何も聞くな。裏の連中には、知ってほしくないことが山ほどあるのを知っているだろ？」

子供を諭すような口調に、ジョンは苛立ちはしなかった。しかし哀愁のような物を感じた。

「そうかよ……」

ジョンは置いてあったフォークを掴み、ステーキにぶつ刺した。

「下品よジョン！」とプリマベアラが怒鳴ってくるが、お構いなしに食い散らかす。おっさん二人組は酒の飲み比べを始めてしまった。トーリアはジュースの入ったコップを両手で持ちながら肩身を狭くしている。広崎は奥の厨房からピザを持ってきていた。トーリアを覗いて四人が盛大に声をあげる。

ボルテアはその光景を黙って見ていた。

「そうだな。俺にも帰るところがあつたな」

ぼそり、と小さく呟いてボルテアはナイフとフォークを掴んで食事始めた。

新人歓迎と顔合わせ2（後書き）

だいたい二重人格のキャラって強いですよね
もちろん、トリアも強いです。

たったこれだけを2つに分けたのは、自分の体力が無いせいだと思います。

下書きもせずに思いつきで書いてますしね……

感想などお待ちしております！

裏の世界は狂気ばかり（前書き）

今思えば、まともに銃を使ってる人間がジョーンしかいませんね
なんでみんな近接武器なんだろう

裏の世界は狂気ばかり

トーリアの歓迎会も終わり、各々が自宅に戻るなり余韻に浸るなり好きにしていた。先ほどの馬鹿騒ぎもどこへやら、という感じで部屋は静まり返っていた。

ジョンはソファーに座って口笛を吹いていた。やはりジャズの曲で、テンポの良さを上手く引き出していた。ジョンは暇さえあれば口笛を吹くほどで、特にこの曲は何度も練習してある。

機嫌よく口笛を吹かしていると、コップ一杯にジューズをなみなみと入れたトーリアが向かいのソファーに座った。

「お上手ですね。口笛」

「ただの暇人の遊びさ」

トーリアの言葉に適当な返事をする、首だけ天を仰ぎながら、また口笛を吹く。

「ジョンさんって、どうして殺し屋になったんですか」

純真無垢で裏表の無い笑顔を浮かべて、裏稼業の人間にはつらい質問をした。しかし、例外としてジョンはつらいことは無い。

「裏の人間に事情を聞くのは控える。人によっちゃあ、テメエより重い過去を背負ってる奴もいる」

トーリアの方を見ずにジョンは答えた。その返答にトーリアは肩を落とす。

「そうですか。すみません、変なこと聞いて」

しりすぼんでいく声に、ようやくジョンはトーリアを見た。容姿、外見に至るまでただの高校生だ。

「まあ、俺が殺し屋になった理由は親父の後を継いだからだ」

その言葉にトーリアは下げた顔を上げた。ジョンは気まずそうに視線を逸らす。

「それだけだ。伝説の殺し屋だとか言われてた人間だからな親父は。サバイバル技術なんかは小さい頃から鍛えられてた」

「スゴいですね。それに比べて自分は、自分のことしか出来ないんですから」

「目の前でクラスメートを虐殺、ねえ。俺は学生時代なんていうのは、不良どもをなぎ倒すぐらいしかしてこなかったから知らねえが、テメエら一般人からしたら相当なシヨックなんだろうな」

物悲しげに語るジョンにトーリアは頷いた。

「この二重人格なんかは、もしかしたら自分の試練なのかも知れません」

幾度となく経験してきた殺人。その中にグロい物が無かつなからと言って、目の前で頭が吹き飛ばされたのを見て嫌悪感は抱いたジョンは考える。

（慣れた俺でも気持ち悪かったんだ。幼いころに、それも虐殺なんて物を見たら精神がおかしくなるのもう頷けるな）

光しか知らない人間に、人間の心の闇はダメージが大きすぎた。

そして、現れた人格はその殺人鬼と同じ『殺人衝動』。

「自分はどうしても変えたいんです。この人間として最悪な自分を捨てたいんです。絶対に表には出ないほどの心の強さが欲しいんです」

「その戦いのせいで闇に飲み込まれるとしても、か？」

「覚悟なんかはここに来てから出来ています。ただ、もし殺人鬼の人格に自分が飲み込まれてしまったら」

トーリアは一拍置いた。

「殺してください。自分を」

ジョンは押し黙った。トーリアもそれっきり喋らない。

そこに、空気も読めていないようなひょうきんな声が響いた。

「話があるんだよ、ってシケてんなあ？ どうした」

荒木だった。酔いも覚めたようで顔も元に戻っていた。しかし、相変わらずのにやけ顔で酒臭さもまだ感じる。

ブローカーという信用第一な人間がこんな調子で大丈夫なのかと心配だが、逆にそういう裏表の無さそうなキャラクターこそが彼がひいきされるゆえんなのかも知れない。

ブローカー荒木大和はワイン瓶を開けて、コップにも入れずに飲みだした。

「くはあ！！ いいねえ、さすがブドウ。んで、なんの話？」

「それこつちのセリフだ！！」

すかさずジョンがツツコミを入れると、荒木は「あれ、そうだった」と腕を組んで考え始めた。

「忘れるくらいなら最初から言うなよ……」

ため息をついた途端に荒木は喜々として声をあげた。

「そうだ仕事の話だ！ ほれ、見てみる」

荒木はポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出した。

「闇金融をサポートする武装集団の頭領を殺せ、と」

「そうそう。しかも、依頼主はその闇金融だぜ。なんでも、大きくなりすぎたせいで闇金融が乗っ取られそうらしい」

「なかなかバカな話じゃないか。トーリアはどう思う？」

珍しげに手紙を後ろから見ていたトーリアにジョンは問いかける。驚いた素振りのトーリアに苦笑した。

「えっと、わがままかな、と思いました」

「小学生の作文かよ。んで荒木、これは誰が行くんだ」

「お前ら二人だよ」

荒木はポケットからもう一枚取り出し、見せびらかすように突き出す。

「ここで頭を抑えたのはジョンだった。

「殺人鬼のお守りか……」

「お前なら一番に安心出来るって、ボルテアも言ってたぞ」

「安心もクソもねえよ……。危機しか無いじゃねーか」

「自分、そう簡単には殺人鬼は出しません！！」

一際大きな声を出したトーリアに、ジョンと荒木は驚いた。

「そういうことだ。頑張れジョン」

荒木は完全に他人事モードに入っているようだ。

「あー、もう。どうしてこんなに疲れることを……。しかも仕事終わってすぐにつて……」

ジョンは肩を落とした。

荒木はそのまま立ち上がって、扉に向かって歩いていく。

「頑張れよ。最強の息子」

そのまま扉が閉まった。

また二人きりになった部屋で、トーリアは唾を飲み込んで言った。

「もし殺人鬼が出てきたら殺してください、自分を」

「断る」

ジョンは即答した。トーリアは目を見開いたまま動かない。

「たとえテメエが闇に飲まれようとな、必ず光を届かせてやるよ」

ジョンはソファから立ち上がった。釣られてトーリアも立つ。

「腕の骨まるまる折ってでも止めてやるよ」

ジョンは扉に歩み寄って開けた。

「気づいたら全身骨折になってないことを祈れよ」

裏の世界は狂気ばかり（後書き）

更新遅れサーセン

テスト期間中なもので……

闇に巣くう光の影（前書き）

一週間を目安に書こうとしてたら、いつの間にかこんな日付に

闇に巣くう光の影

ジョンの右斜め後ろをトーリアが付いてくる。夜の街が二人を照らす。

とても二人とも殺し屋には見えないし、そもそも闇の住人にさえ見えるはずもない。唯一周りとは違うのは、二人ともが大きめの皮力バンをぶら下げていることだ。

トボトボと歩いていると、闇金融に依頼された武装集団のアジトに着いた。古びた外観から隠れ家を意識しているのだろうが、明らかに浮いていた。

「ここか」

ジョンはすぐさまカバンを開いておもむろに漁った。中から出てきたのは、前の依頼と同じデザインの防弾服だった。慣れた手つきで着込むジョンを、トーリアはまじまじと見つめる。

その様子に気づいたジョンが、そでに腕を通すのを止めて話しかけた。

「どうした？ 着ないのか？」

「え、いや、あんまり珍しいものですから……」

そう言っただけで小さく吹き出したのを確認したのち、ジョンはそでを通してカバンからハンドガンを取り出す。それを見てトーリアは肩を跳ね上げた。

「あ、あ……」

唇が震えていた。舌も回ってないのか、か行を連続的に漏らす。

「おい、トーリア？」

ジョンが怪訝に思い、肩を揺さぶる。揺さぶれてようやく気がついたトーリアは、俯いた。

「あの、それを僕に見せなくてもええですか」

それ、と言われると真っ先に察したのはハンドガンだった。これは殺人道具だった。

ジョンはハンドガンをベルトにくっつけてあるミニケースへ入れると呼びかけの声をあげる。おどおどと顔を上げたトリアは、ハンドガンが視界に無いことに深くため息を吐いた。

ジョンが気まずそうに後頭部をポリポリと掻く。

「ハンドガンを見ただけでコレか……」

「すみません。形は全く覚えてないんですが、ハンドガンだったことは覚えていて」

今度はトリアが気まずそうに頭を下げた。

ジョンはトリアのカバンを持ち上げて、突きつける。

「それがテメエの戦いだろ。逃げるな」

鬼畜と呼ばれるほど冷酷に言い放った。トリアは渋々といった様子でカバンを受け取り、中身を取り出す。

「えっ、と。なんですこれ」

入っていたのは、まるで黒い大きな布を無理やりに服にして、余った部分をマントにしたような形だ。内側は赤く塗られていた。付属として、黒いズボンも同封してある。

「スニーキングには向いてるんじゃないね」

ジョンがあまり興味の無いような調子で返す。

「ちよつと待つてくださいよ！ コレじゃあ、銃弾受けたら確実にアウト……」

「避ければいいだろ。いざとなったら殺人鬼の人格に頼れ」

鬼畜に鬼畜を上塗りした言葉をマトモに受けて、トリアはへこんでしまった。

その変な服を着て、カバンの奥底にあった折り畳みの大鎌を持ち上げた。

「まるで死神だな」

「誰がこんなの選んだんですか！？ もう！」

グチグチぶつぶつと呟いていたトリアだったが、ジョンが先々と進もうとしたのを見て慌てて追いかけていった。

……。

「こりゃひどい」

武装集団のアジトの中はまるで大地震が来た時のように荒れていた。家具は砕け、皿が割れ、見渡す限りに人が倒れていた。

その光景にトーリアは息を詰まらせた。喘息にでもかかったかのように荒々しい咳をする。

「で、てくるな……」

必死に抑えつけようとしているのは言われなくても分かった。

（芝居かなにかか？）

ジョンが一瞬、そんな下らないことを考えたが事態の悪い様子で冗談ではないことを察する。咳が収まるまで立ち尽くすことにした。まるで悪い病気の末期のように咳を繰り返すトーリアをさすがに心配に思ったジョンは、背中をさすってやろうとする。

「ありが、とうございます……」

「死なれたら困るんでな」

ハンドガンをトーリアに見えない位置でリロードする。

（今回はほぼ確実に撃ち合いになる。めんどろになる前に脱出ルートを確認しておくか）

などと算段を建てていると、後ろから咳の収まったトーリアが声をあげた。

「それにしても、どうしてこんなことに……」

「はは、また前みたいなことになったら流石に泣くぜ」

首を傾げるトーリアに向き直ろうとした時、外からやけに騒がしい音が聞こえた。

一定の音程の高低が繰り返され、高く鳴り響いている。その音はこちらに迫っており、赤い光がアジトの中を照らし始めた。

まるでこれは

「ポリス!？」

「え？ ポリスって、ええ!？」

ジョンが真つ先に走り出し、トーリアがそれを必死に追いかける。幸いにもアジトは地下と二階に上がる階段があり、ジョンたちは二階へと上がった。

「だつはーい!! ここじゃ逃げ道無いじゃん俺のバカ!！」

「どうすんです!？」

大慌てで喚いていると、上からも慌てる声が聞こえてきた。

「三階に誰がいるな」

また階段に向かって全力疾走する。トーリアは汗もかかずに走っているが、重装備なジョンにはちよつとばかしキツイ。汗が流れて気持ちが悪くなってしまった。

二段飛ばしで駆け上がり、荒い息を吐きながら部屋を見渡した。

「おや、ようやくご到着ですか」

そこには、なぜかマントを付けた場違いなピエロがいた。

「今回は最高に楽しいサーカスになりそうだ」

その場違いピエロは大きく手を広げて、背中に両手を回してハサミを取り出した。

「血が踊り、血が飛び、血が荒れるサーカスに」

死鎌「ガーディアン」(前書き)

前回はあまりにも短すぎましたね……

死鎌「ガーディアン」

身構えるのに、そう時間はかからなかった。

トーリアの鎌からチェーンソーのような振動音が鳴り響き、静まり返った空間に反響する。

ピエロの向こうでは、三人ほどの男が立っていた。

一番強面な男が口を開く。

「ワールド・キル……、もう嗅ぎつけやがったか」

探るような声だった。

ワールド・キル。それはジョンと敵対した国際的殺し屋組織。

そのうちの一人が目の前にいる。

「ふーん……。アームストロングの汁でもすすするつもりでしょうか、そうも上手くは行きませんかよ？」

ピエロがあざけ笑う。

その強面の男は引き金を引かれた拳銃の弾のように、その笑い声と共にピエロへ走り寄る。

「うーん、面白くないですね」

ピエロはどこからか取り出したハサミで強面の男の腹を突き刺す。男は口から血を吐き、ハサミを抜こうと必死に両手で掴んでいる。それを見て、更に大笑いするピエロ。

「ガッ……はあ……っ……！」

次はトーリアが呻き出した。頭を抑えてうずくまってしまうている。ジョンが駆け寄ると、手でジョンの手をはじいた。

俯いて、肩を震わせ、両手で自分を抱くようにしている。寒がっているようにも見えるが、とてもそんな生易しい考えはジョンには浮かばなかった。

「近寄らないでください……、殺人鬼の、人格が……あぁっ……！」
ガーディアン
「死鎌……！」

トーリアのコードネームを叫ぶ。しかし、ジョンは叫ぶには叫ぶ

が触れられない。

威圧感。

トーリアの体中からブレッシャーのように重たい物が滲み出ていく感覚が全身を走ったのだ。

近づけば殺される。本能が察知した。

「おや？ そっちは何してるんですか？」

ジョンはピエロに視線を戻す。

そこでは、すでに絶命したのか白目で口をあぐりと開けた男の腹を何度もハサミで抉り、内臓やら何やら得体の知れない物を撒き散らす真つ赤なピエロがいた。

もう肉なのか分からない物が床に散るのを見て、ジョンは顔を強ばらせた。

「楽しいですね。コ・ロ・シって……ヒヒッ」

顔から服装まで血で染まりながら優しく微笑む様は狂気と呼ぶにふさわしい物だろう。ジョンの顔、腕、背筋、足全てに鳥肌が起くる。

ジョンは呆気にとられた。

（なんなんだよ……、いきなりこんな超展開！！）

後ずさる足に引け目は感じなかった。こんな状況で普通でいられる奴の方がおかしい、と自分に言い聞かせて。

退いたとき、トーリアの様子が変わったことに気づいた。肩の震えも消え、落ち着いていた。

ジョンはトーリアの肩に手を置く。

「大丈夫か、ガーディアン」

だが、帰ってきた返事は

「死ね」

チェーンソーの鎌をジョンの首めがけて振り払った。慌ててジョンは後ろに倒れて回避する。

「ガーディアン……殺す気かよ……！」

倒れたままトリアを見上げる。

そこには、あの優しい顔のトリアはいなかった。

「私は食らいます、肉を。ここに墓標はいりません。骨まで食べるから」

トリアの目は死んでいた。あの優しそうな瞳はどこにもなく、ただ眉間に深く深くシワが刻まれていた。

その口を、まるで布を引き裂いたようにパカッと開ける。

「血は飲み物です。ならば肉は？」

また、おぞましい言葉を並べる。

「肉は食べ物です。なら骨は？」

口からよだれを垂らし、興奮しているのか鼻息が荒い。

「骨は……、口直しのコーンです」

「いいえ、体の一部ですよ」

いつの間にか眼前に現れたピエロがハサミでトリアを刺す。そのハサミを鎌で打ち返し、ピエロに向かって振り下ろした。

トリアは奇怪に笑う。

「不正解っ」

鼻歌を歌うように鎌を叩きつける。だが、ピエロはハサミでそれを受け止めた。

ピエロは頬を引きつらせて言う。

「じゃあ、あなたの骨は？」

「獲物を狩るための道具です」

機械的に繰り返される言葉に、ピエロやジョンどころか他の男二人も怖じ気づいた。

「その道具はへし折らせてもらいます」

ピエロは自力で鎌を押し返し、ハサミを捨てて鎌を持つ腕を、まるで木の枝を折るように簡単に折った。

腕が曲がるはずの無いところで折れた。本当に木の枝を折ったような音が耳に残る。

「これが、殺人鬼……」

殺人鬼というよりも、カニバリズムというのが正しそうだ。人肉を食おうとしている辺り、食人の殺人格なのだろう。

腕を抱えて、トーリアは絶叫する。

「ジョンさん」

ピエロがなぜかジョンを呼んだ。

睨みつけながらピエロを見る。

「なんだ」

こんな緊張感では保てたかどうか不安だが、冷静で素っ気ない態度をする。

ピエロは薄く笑うと言った。

「こんな化け物、救いようが無いですね」

キレたジョンがハンドガンを構えるより先に、二人の男のうち一人がハンドガンを構えた。

「我らスモークファミリーに、いや、このエルレイ様に喧嘩売って生きて帰れると思うなよ!!」

そう叫んで引き金を引いた。弾丸は真っ直ぐピエロの心臓に飛んでいく。

「知りませんね」

ピエロはトーリアを掴み、男たちに向けた盾。

銃弾はトーリアの肩に突き刺さった。

「緩和材にくらいなればいいと思いましたが、意外に耐久性はあるんですね」

トーリアの肩から血が吹き出す。

「ぎいあいあああああああああああああああああああ！
！！」

肺を爆発させたかのような絶叫が轟いた。

エルレイがハンドガンを構えたまま、表情を固まらせた。

「まさか……、ガキを盾に使うなんて……」

「ふふ、非道ですか？ それとも残虐？ いや、残酷とも言えるかな」

ピエロは視線を宙に泳がせて言葉を選んでいた。

ジョンがハンドガンを構える。

「テメエのは、非道でも残虐でも残酷でもねえ。人外だ」

「なるほど、それも言えますね」

ピエロはまた不敵に笑ってみせた。

苛立ちが溢れてくる。

「離せ、ガーディアンを」

「嫌です。これは丁度いい盾なんですから」

そこで言葉を区切るように、何か機械を通した音がビルに響いた。

「犯人に告ぐ！ 今すぐそこから出てこい！！」

女の声だった。

（さっきの、最近聞いたことが……）

そこにいた全員が固まった中、合点の行ったジョンが声を張り上げた。

「日向！？」

そう。この声は日向だった。

ジョンと強盗犯のごたごたに横やりを挟み、ジョンをアメリカの警察と間違えた日向だった。

日向は怪盗の捜査を担当していたはずだ。なぜココに来るのだろう。人手が足りなかった？ いいや、有り得ない。人員が少なくなるなんてまず起きた試しが無い。
なら。

「怪盗が、ここにいる？」

その言葉でピエロは今までに無い大きな笑い声をあげた。

「やはり、アイツがハメやがったみたいですね」

暴君「レックス」

IT企業に偽装したビルの最上階、VIPルームで大男が不適に笑っていた。

その男は部屋の煌びやかな装飾などに似つかわしくないすす汚れた緑色の分厚い服を着ている。まるで戦争の舞台に溢れかえる兵士のような格好だった。

VIPルームの側面に壁が無い面があり、そこはガラスだけが貼られており外が一望できる。男はそこからパトカーの集まる建物を眺めていた。

男の後ろにある扉が横に真つ二つに裂けるように開き、男と同じ分厚い服を着た人間が入ってきた。マスクは顔全体を覆っており、鼻と口近くに穴がポツポツと空いている程度だった。

「レックス様。諜報メンバーリーダーの確保可能の報告に参りました」

声は女だった。

女の声にレックスと呼ばれた大男はゆっくりと振り返る。

「電脳装置は奴が持っているのか」

レックスの顔は、まるで鬼や悪魔をモチーフにしたのかと疑うほどのヒドい形相だった。目や鼻、口から耳まで歪んでおり、人間だと認識するのに時間がかかる。

そして声。機械を通して喋っているかのような人間ではない声だった。

先ほど入ってきた女がレックスを見て背筋を寒くさせる。

（顔、なんかじゃない……。怖い……！）

背筋の寒気の原因は顔ではなかった。

もっと不確かな物。

「……ダークネス」

歪めた顔を、更に歪ませて笑う。それは笑いを素直に受け取れるような生易しい物ではなく、まるで何か黒い感情を喜びと間違えたかのような薄気味悪さがあった。

これはまるで

（……殺気）

気づいてしまったてはもう自分を騙せない。

女は体中が震え始め、歯が噛み合わなくなり、とてもその場にいられるような状態ではなかった。

（早く……早く……！）

その殺気も肌で感じるというより、体の芯まで食い尽くす悪魔のオーラに感じた。常人に出せるような代物ではない。

たとえ、それが『自分の命を握る者』のことであっても。

「今、恐怖を感じているな」

レックスの人間ではない声が発せられた。

まるで体がおかしくなったかのように汗が止まらない。

ただ、噛み合わない歯で「はい」と答えるのが精一杯だった。

「そうか。なら、早々に立ち去れ」

「し、しかし、レックス様のご指示を……」

最低限の言い回しは言った。

そしてここで女は後悔する。

（なんでわざわざ逆鱗に触れるような真似してんのよ私……！）

しかし、返ってきた言葉はなんとも単調だった。

「まだ捕獲するな」

「はい、わ、分かりました」

そう言い残し、女は平静を装いながらも急いで外に出た。

扉が完全に閉まり、殺気に解放された緊張感が体を包む。そのままへたれこもつとしていた時だった。

心臓が止まりそうなほどの圧迫感が女を襲った。

鉄の壁一つを通り越してやってくる殺気は部屋にいたときと比べ物にならなかった。

女は気がおかしくなりそうになり、泣きながら階段を駆け下りていった。

「ダークネス、貴様だけは必ず殺すぞ」

……。

警察に囲まれ、殺人鬼を抱え、ハサミを持ったおかしなピエロという絶望的状况に立っている男が一人。

ジョンだ。

（ふざけんなよ！！ どうやったら、トリアを助けられるんだよ！！）

ピエロは血を流し絶叫しているトリアを投げ捨てて言った。

「軍事メンバーの皆さん。そこにいるのは分かっています」

しかし、誰も何も答えない。

「なるほど。意地でも出てこないつもりですか。なら」

ダークネスは天井の隅にハサミを投げつけた。ハサミは刃が深く突き刺さって落ちてこなくなった。

そして、ダークネスがなぜか腕を野球ボールを思いきり投げるように振りかぶる。

とたんに天井は砕け、がれきと共に人間が三人落ちてきた。どれも打ち所が悪く、呻いて立ち上がらない。

ジョンが絶句し、スモーキーファミリーの男が目を丸くする。

「な、なんなんだよコレ!？」

トーリアを撃ち抜いたエルレイという男ではない、部下らしき男が叫んだ。

エルレイは腰が抜けたようにへたり込む。

「まさか、本当にワールド・キルなのか……?」

ピエロは不適に笑う。

「そうですねえ。それでも諜報という課業を任されていますがね」

「ほ、本職が殺し屋じゃないなら、どうしてここにいるんだよ!？」

「いえ、この方がアームストロングの傘下だと聞きました」

「アームストロング? まさか、テメエが神の見えざる手を」

言い終わる前にピエロのハサミがエルレイの喉に突き刺さった。

「カ……カア………ア……!」

痰を絡ませているような声にならない声が続く。やがて下手くそな口笛を吹くような空気の通る音が数秒続き、エルレイは倒れた。首から血が溢れ水たまりができる。

ピエロが腕を振るとハサミがピエロに向かって飛んでいった。

部下の男はその光景に気絶する。

「ふーん、ファミリーを名乗る割に弱いんですね」

「ダークネス……」

次は、先ほど落ちてきたうちの一人が声を発した。

ジョンとピエロは振り向く。

「さつさと、電腦装置を返しやがれ……!」

「お断りします。唯一の諜報メンバーを三竦みに置ける道具ですからね」

ピエロことダークネスは用意されていた言葉のようにさらっと答えた。

「待てよ」

ジョンが口を挟んだ。

「このピエロ野郎。神の見えざる手かと思ったたら、次はなんとか装

置。何者だ」

「だから名乗っているでしょう。ワールド・キルだと」

「んなことは端から了分かってんだよ！俺が聞きたい解答は、お前の目的だ！」

「なぜアナタが知る必要があるのです」

「何か野望があるんなら、平和を乱すなら潰す」

その言葉にダークネスは高笑いをあげた。

「何も平和を乱すつもりはありません。むしろ、平和を守るんです」

「は？なに言って」

ジョンの喉めがけてハサミが投げられた。

体を軽く傾けて回避する。

「い、いきなり……！」

「お荷物を守るのはどうしました？」

ダークネスが腕を振る。ハサミが刃をトーリアに向けながら高速で接近してくる。

当たる直前、ジョンはハンドガンを撃ちハサミの動きをずらした。

（このピエロ野郎のタネは……！）

「さて、さつさと死んでもらいたいのですが」

ダークネスがハサミを構える。

ジョンは、いつの間にか失血多量で気絶したトーリアを抱きかかえる。

（クソ……早くしないとトーリアまで死んでしまう……）

緊張感が駆け抜ける長い一瞬の最中、外から声が聞こえた。

「突撃します……！」

低い声のポリスだった。日向ではない。

「このまま捕まっても面倒ですね……」

ダークネスがぼつりと呟いた。

しかし、その次の言葉は大きな声だった。

「あなたはワールド・キルの要注意人物の一人ですよ!!」

そう言い残し、砕けた天井の更に上の階の天井にハサミを投げつけ、突き刺した。そして、まるで糸に引っ張られるように昇っていく。

「その人間三人は暫くしたら回収に参ります。その時まで
ダークネスはそう言い残し去っていった。

「なにが、どうなってんだ……」

……。

トリアは柔らかい感触の中で目を覚ます。

(あれ……、ここは……)

まぶたを開くと一面が白い世界だった。

「トリアっ!」

目を開けた直後、何者かに抱きつかれる。

「おわっ!? な、なんだボルテアか……」

白い世界にそっくりな白い髪と、ひときわ異色を放つ赤い瞳の女の子がいた。

その小さな体型とは思えないほど強い力で抱きしめられる。

「良かった、本当に良かった」

ボルテアを見ると同時に視界に映る物を一つ一つ確かめる。どうやら病院らしい。

「トリア君」

大人っぽい声が聞こえ、そちらに顔を向ける。

髪は金髪で瞳は青。そして胸の大きなスタイルの良い女の人が立っていた。

「あなたは……?」

「ジョンの恋人のケリー」バイオレントです！　ってそんな歳でもないかな。あ、でもジョンとは同じ年よ」

「はあ……」

「肩に銃弾程度を受けて、興奮状態に筋肉の奮起で血が余計に流出して失血。そして気絶したの。筋肉が奮起するほどの興奮状態って、どこの筋肉バカよ」

「よく……覚えてないんです……」

「そうなの？　そういえばあなた、3日も眠り続けてたのよ」

「3日？」

「そうだぞ」

ボルテアが口を挟む。

「ジョンから入院の話を聞かされた時は本当に心配したんだからな！」

「はは、ごめん。でも、どうしてアナタがそんなことを」

「この院長。メシアの子って聞いたことない？」

「トーリアは視線を外し、寝ぼけた頭で情報をひねり出す。

「もしかして、前にテレビに出てました？」

「正解！　そのケリー」バイオレントよ」

「ええ！？　最年少で院長になり、なおかつ一度も死者を出したことの無いあの……あ」

「ここが病院だと思い出したトーリアは口を閉じる。

ケリーは笑顔を浮かべる。

「大丈夫。他の患者はいないわ」

「よかった……」

「まあ、さっきの言葉は本当よ。『医者になってから』は一人も死なせていないわ」

その言葉に引っかかる部分があった。

「『医者になってから』、というのは？」

「鋭いわね。実は私、昔は戦場で毒薬などを扱ってたのよ」

「ええ！？　じゃあ、どうして医者に？」

「聞きたい？ ジョンと私の運命の出会い」

ケリーは淡々と語る。

次の章に続く。

暴君「レックス」(後書き)

どうでしたか？

かなり早い展開ですが、分かりにくかったらコメントしてください。

なんとか頑張って説明します。

ダークネスが天井にハサミを突き刺して天井を壊せたのはハサミを横一線に動かして砕いたからです。

自分でも何言ってるのか分かりませんが、つまりそういうことです。

感想などお待ちしてます！

初任務（前書き）

いろいろ話が早すぎて着いて来れない方、すみません……

初任務

「運命の出会い？」

「そう」

ケリーは夢でも見ているかのように目を輝かせる。初恋の人を思ふかのような純粋な瞳にトーリアは引き込まれそうになった。

隣ではトーリアに抱きついていていたボルテアが腕を組み、目を閉じて笑っていた。

「ジョンの初任務はな……」

「初任務？」

「ケリーを殺すことだったんだ」

トーリアは目を開き、口をあんぐりと開けた。

まず殺し屋に狙われて、どうして無事でいるのか。

いや、そんなことよりもだ。なぜ自分を殺しに来た相手と普通に接することが出来るのか。

（どういうことなんだ……？）

トーリアは小一時間問い詰めたい思いに駆られながらも続きを聞くことにした。

ボルテアの代わりにケリーが話す。

「確かあれは、小規模の内戦だったかしら。価値観の違いによる衝突だった。けど、小規模だったせいか表の記録なんかは残ってないと思う」

「価値観の違い？」

「半島を二分する戦争だね。民族もあったんでしょうけど、表向きは法律。その援軍として呼ばれたのが私の小隊なの」

「元グリーンベレーの奴もいたっけか」

ボルテアが横やりを入れる。

「そうそう。グリーンベレーね。その人の命令でいろいろ毒薬作ってただけど、後からヤバいのも作れるようになったちゃって」

「ヤバいの？」

「神経を徐々に衰退させ、最終的には死に至る物なんだけど、霧状だからビンに入れて投げれば簡単に感染する仕組みなの」

「でも、風向きなんかでケリーさん側にも危険があるはず」

「ああ、それね。地形の影響かは知らないけど追い風しか無いのよ」「それでジョンさんが？」

「このまま霧が追い風に乘せられて飛んでいけば、無関係な人まで毒薬を吸う恐れがある。だからジョンが呼ばれたんだ」

ボルテアは言った。

「そういう任務だったの？ 実は単純に戦争に勝ちただけだったんだけどね。あとはお金かな」

「はあ。でも、ケリーさんがここにいてことは任務は失敗したんですか？」

「いいえ。大成功だったわ。これからそれを話すの」

……。

南米の小さな半島で小規模の内戦が勃発していた。

東西の両軍はどちらもほぼ同じ戦力。このままでは共倒れという状況の最中、

ケリーは神経麻痺を応用した毒薬を開発。

これにより戦力という天秤はケリーの所属する部隊『レックス』のおかげで東へと傾いた。

もう少して勝利は確実になるという前、

「いるか。ミレー博士」

体にして2メートルを誇る巨体。野戦服は砂などで汚れていた。ゼニア・クラナスが研究所に顔を覗かせた。

その男こそ、ボルテアたちの話していた元グリーンベレーの兵士だった。今は事情により辞めているが、実力はグリーンベレーの時とさして変わる物はない。

中にいたケリーを除く学者たちは顔を引きつらせる。

ケリーの席は奥。ガラスの箱にチューブの通った物に手袋を入れて作業をしていた。

ゼニアは真っ直ぐにケリーへと近づく。

「ミレー博士。毒薬の調合具合はどうですか」

ゼニアはケリーをミレーと呼ぶ。

彼女はミレーという名前が本名だった。

「入らないように、扉を閉めて。温度を下げて液状にしていますが、この地方の気温に近づけばすぐにでも気体になりますよ」

今のケリーとは似ても似つかないほど平坦な喋り方をしていた。

「すまない。しかし、この目で勝利への確信を味わいたいものでな」

ガハハ、とゼニアは大笑いした。

「そしてもう一つ用事があるんだが」

「なんでしょう」

ケリーはガラスの箱の中にある毒液から目を離さないまま言った。

「実はな。西の奴らが殺し屋を雇いおった」

「それで？」

「まだ明確なターゲットは決まってないのは明らかだが、間違いない狙われるのはアンタだ」

「どうしてですか」

「言わなくても分かるだろう。戦況を一変させるようなモンを作ってるのだから」

「確かに。この薬のおかげで戦況はめまぐるしい変わりました」

「相手の依頼は『この毒薬を作っている研究員の抹殺』ということこ

るか」

その言葉を聞いたケリー以外の研究員が肩を跳ね上げ、悲鳴にも似た声をあげる。

それをゼニアは嬉しそうに見返し、視線を戻す。

「ミレー博士。アンタは戦争の歯車だ。こんなところで死ぬのは勿体無い」

「戦争の歯車……」

「そうだ。アンタは独学でその毒薬を作った。その技術こそまだ知られていないが、この戦争が終われば名を世界に知らしめることになる」

「私をそんなものに興味ありません」

「そうは言っていていられなくなる。そうなれば世界中がお前を欲し、妬み、殺そうとするだろう。だからこそ、アンタには生きてもらいたい」

「なぜ？」

「ビジネスとしてだ」

ゼニアは笑う。

「その技術で大金が動くことになるだろう。すでにこれを伝えた同盟国から欲しがっている者がいる」

「それほどまで需要は無いはずですよ。運良く地形が作用しているだけ」

「だが、ビンに収められるなら他にも入れることが出来るはずだ」

「……どういう意味です？」

「兵器だよ。その気体を液化させ、ショットガンの容量で内側から破裂させる過程で気体に出来れば毒薬は一気に広がる」

「この毒薬は高温では効果は薄まります」

「嘘を吐くんじゃない。知っているぞ？ この薬を作った時、それは高温だった。それも爆薬と同じような状況でだ」

ケリーは下唇を噛む。

完全に負けだったからだ。ここで意地を張ったところで意味は無

い。この戦争が終わってからいくらでも確かめる余地がある。

「話題が外れたな。警備は任せておけ。巡回は二十四時間やらせる」

「……はい」

ケリーは一言返事をする。

……。

「は、はは初任務か」

ジョンは崖の上から東側の基地を双眼鏡で見っていた。

どこを見ても兵士ばかり。

心の奥から不安と恐怖がこみ上げる。

「でも、相手は研究員らしいしな。殺すに手間取ることとは無さそう
だ」

赤茶色の大地にはとても目立つ白色の建物を見て呟く。

「楽勝……かな」

初任務（後書き）

最初にスニーキングをすると約束したな。あれは嘘D A。

投稿遅れてすみません

殺気を越えた何か（前書き）

遅れましたすみません……

殺気を超えた何か

ジョンの視界に研究所らしきところから出てくる影を見つけた。

「あいつか……？」

双眼鏡の倍率を最大にし、姿を確認する。

見えた物は巨体の男だった。防弾服のような物を着込んでいたり、兵士か何かだろう、と推測する。

ふいに、男が立ち止まった。

「ど、どうしたんだ……？」

汗が流れ始める。

不安が胸元から全身に駆け巡った。

案の定、というべきだろうか、男はこちらを完全に見据えた。男と目が合う。

ジョンは弾かれたように立ち上がる。

「気づかれ……」

言葉を発し、すぐに立ち去ろうとする寸前

異常なほどの恐怖、不安、苛立ちがこみ上げた。

どう例えればいいのか言葉が見つからない。

ただ、男と目が合った瞬間にこの世の全てがどうでもよくなったような。今すぐにでも死にたくなるような。いつそのこと何もかも壊してしまおうかと思うほどの負の感情が湧き上がった。

ジョンは地に叩きつけられたように倒れ込み、苦しみにもがく。

「あが……が……」

息すらも許さない言い表せない感情が脳を支配する。

（死にたい死にたい！！くそつくそつ！！）

なにがあったわけでもない。別に生活に不満などない。これといった恐怖すら無い。

ただ、男の目を見た瞬間にどす黒い物がジョンを支配し始めたのだ。

涙が止まらなくなり、心臓の鼓動も早くなる。気を抜けば失禁してしまうんじゃないかと思えるほどの恐怖。

呼吸の音、心臓の鳴る音ですら耳障りに感じるほどの苛立ち。

頭がおかしくなったんじゃないかと思え、いつそ舌を嚙んでしまおうとさえ考えてしまうほどだった。

そんなジョンの葛藤はまるで数時間に及ぶように感じたが、一分すらも経っていない。

ようやく落ち着きを取り戻し、ジョンは袖で涙を拭った。

「なん、なんだ今の……」

ジョンの父親が出していた殺気に似ていた。でも、根本的に違うような、別次元の物な気がした。

「とにかく、今は任務だ……」

双眼鏡を着けず、男の姿を影だけで捉えるようにしながら、いなくなるのを待った。

……。

ジョンは崖から降り、研究所などが並ぶキャンプ場のような場所に到着した。と言っても、一キロほど離れた林から眺めているだけだった。

兵士たちはしきりに移動しており、巡回兵とかではなく、単純に好き勝手に動いているだけのようだ。一見して遊び気分の隙を突くのは簡単だと思うが、逆に言えば不規則なせいでパターンも分からず動けずじまいになる。

ジョンはその不規則の隙を突こうと必死に目を動かす。

「時刻はだいたい昼過ぎ……。さっさとみんな仲良くランチでもし

てくれよ」

焦りが足を押しそうなのをこらえ、隠密に徹する。
やるべきことは暗殺。

眉間に一発ぶち込めばいいだけのこと。

「でも……どんな奴か聞かされてないんだよなあ……」

依頼主からは毒薬を開発している研究員としか知らされていない。なら片っ端から殺せばいいのか？ それは違う。ジョンの使う銃にはサプレッサーと呼ばれる音を拡散し極力小さくする物が取り付けられている。しかし、それは銃口部分に付けるため弾丸がサプレッサーに当たる。……つまり壊れるのだ。壊れれば音は研究所どころか三つ向こうの兵士たちが住まう建物にすら簡単に届いてしまう。そうなれば一斉に兵士たちがジョンを取り囲むだろう。もちろん、ジョンに軍勢を相手に戦える技量など無い。
「とにかく、まずは研究所に入らないとな」
ハンドガンを握りしめる手に力が入る。

……。

「ミレー博士」

研究所内。ケリーがガラスの箱に神経を集中させていると、年老的な声がケリーを呼んだ。

首を少し動かし、視線を向ける。

「ミレー博士、本当にすまないね」

相手はこの研究所の所長だった。

白髪の生えた老人だ。物怖じしない独特の雰囲気醸し出すのはその顎髭の長さもある。服装は他の研究員と変わらず白衣。

その所長はケリーに頭を下げた。

「君にはすまないことをした。成績優秀な君を抜擢したのは間違い

なく私だ。君はこんな人殺しの道具なんかじゃなく、医学について学びたかったんだろう？」

「気にしてません。もう慣れました」

「こんな世界に慣れさせてしまったのは私の責任だ。どうしても償いたい」

実はこの所長、ケリーの通う大学の名誉教授だった人間だ。上層部から優秀な生徒を何人か軍事に回せという指令を受けていた。それに当たったのがケリーだった。

対してケリーは大学の時のような明るさを失った。それを所長はとても後悔しているのだ。

容姿淡麗。才色兼備とさえ言われた女の子を、こんな血なまぐさい場所に浸し、あまつさえ笑顔を奪ったことに心を痛めていた。ケリーは視線をガラスの箱に戻すと、抑揚の無い声で言った。

「じゃあ、ぬいぐるみ……」

「い、今なんと？」

「ぬいぐるみが欲しいです……」

小声で、顔をいつもより背けながら言った。

その女の子らしい言葉に心底安心した所長は柔らかな笑顔を浮かべる。

「ああ、君の望むことをしよう」

この時、所長はすでに父性のような物が戻ってきていたのかも知れない。妻や子供と過ごしていた時のような、責任感だとか父性愛だとか。それがケリーと過ごすことで戻ってきていた。

「ミレー君、いつでも頼ってくれ」

ここに来て、初めて所長はケリーを博士ではなく君と呼んだ。すぐに回れ右をしてケリーから背を向ける。

対してケリーは驚いたように所長の背中を見つめた。

「約束ですよ、ぬいぐるみ」

「とびつきり可愛いのを買ってやろう。約束だ」

振り返り、もう一度ケリーに微笑む。そのまま所長は違う部屋へ

と去って行った。

「お父さん……」

ふと、ケリーがその言葉を呟いた。

所長の背中に、生前の頃の父を思い出して。

殺気を越えた何か（後書き）

現実的じゃなくなったかな

二人の邂逅

ジョンはハンドガンをしつかりと構え、研究所前にいるボーットした兵士の『頭』めがけて銃口を合わせる。練習した通りのことをこなそうにも、実戦経験は一度たりとも積んでいないため、極度の緊張感が精神に突き刺さる。

いつの間にか手が汗まみれで、ヌルヌルとした感触が不快感を、それに加えて焦りも生む。

息を一度飲み込み、標準の目安となっている出っ張りを見つめる。

「……ここか」

震える手つきで引き金を引く。

広がっていく小さな音は雑音にかき消され、銃口から飛び出した針のような弾が兵士の頭に刺さる。

そのまま呻き声もあげず、その場に倒れた。

「ふう、当たったみたいだ」

今放った弾丸は麻酔だ。針のような細かい物のおかげで一目では分かりにくい、そして殺すことも無いので倒れているところを他の兵士に見られても、不審には思われない。

姿勢を低くし、兵士のところまで走りきる。

扉は案外近くにあり、そつと扉を開け、閉じた。

医薬品の臭いは扉を開けた辺りから嗅げた。鼻にツーンと来る酸っぱいような辛いような臭いだ。

ジョンは慣れていない臭いのせいで嫌悪感を抱き、感想を呟く。

「……歯医者臭い」

的を射ているといえそうだろう。しかし、こんな状況で言うようなものでもなし、ジョンは目の前のテーブルに身を潜める。

四本足のテーブルで、下には大人一人潜り込めるスペースがある。しかし、長居は出来ない。隠す物がないために、覗かれれば一目でバレるだろう。

息を潜め、テーブルの下から付近の状況を確認する。

見えるのは研究員が四人。並べられているのはジョンの隠れているテーブルと同じ物。その上では得体の知れない液体が次々と違う容器に入れては出されを繰り返していた。

「行けるか？」

ちょうどひとつ飛びで行けそうな距離の先にテーブルがある。研究員は薬品を取り出そうと後ろの棚に振り返った。

その隙にテーブルの下からテーブルの下へ、即座に転がり込む。幸いにも気づかれなかったようで、周りの研究員はおるか棚から戻ってきた研究員も気づいてはいない。

「さて、どうしようか……」

また後ろを向いた時にでも這い出て、奥の扉に入ることも出来ない。だが、それは逆に見つかるというリスクも背負うことになる。

「やってみないと……な」

背筋から汗が噴き出す。

見つかったらどうなるんだ、だとか、たとえ成功してもその先に人がいればおしまいだ、とか。

ネガティブなことばかり考えてしまふ。しかし、ここまで来たら進むしかない。

「安全に進む方法は……」

とにかく決めたからには進む。でも失敗の確率だけは下げたい。ポケットを漁る。すると、一枚のコインが手に当たった。

「なんだこれ……」

何かの偉人の横顔が描かれており、通貨ではないのは確かだった。誰がこんなもん……あ」

捨てようかと悩んだが、ここで思いついた。

「これで意識を他に向けられるんじゃないか」

コインを親指と人差し指で挟む。

素振りの練習を何回か行くと、扉とは真逆の方向に向かって投げ

た。

無機質な金属音が床に跳ね、音を立てる。

研究員は全員がすぐにその音の方へ視線を向けた。

ジョンはすかさず扉まで転がり、扉を開ける。そして、中に入った。

「ふう……危ないあぶな」

一息つくこうかと思ったところで、目を丸くした。

目の前に女の研究員がこちらをじっと見ていたからだ。

明らかに驚きの表情をしている。

女研究員は顔を小さく歪ませると、

「ひっ」

と息を呑んだ声を出す。ここまで聞こえれば、あとは悲鳴とは想像がつくだろう。

ジョンは慌てて口を塞ぐ。

「驚かせやがって……」

「んー！ んんー！！」

女研究員は身じろぎをするが、結局は無駄な抵抗に終わり、肩を落とした。

ジョンはなだめるように話しかける。

「落ち着いてくれ。ここで叫ばれるとこちらも困るんだよ」

「んー……んーん」

「え？ 離せって？」

女研究員の口から急いで手を離す。こういうところがジョンのお人好しなところだ。離せば、叫べと言っているようなものだ。

だが女研究員は叫びもせず、ジョンの前に向き直った。

「アナタが殺し屋？」

「ど、どうしてそれを？」

「あの男から聞いてるわ。私の兵器が危険だってことで殺しに来た

「んでしょ？」

「つてことは、君があつた」

「そう。名前はミレーよ」

自分を殺しに来た相手にここまで馴れ馴れしく、丁寧な会話が出るものなのだろうか、と殺し屋本人であるジョンは小首を傾げつつ考える。

そして名前まで教える。

「えつと、ミレー？」

「なあに？」

「俺にそこまで教えちゃつていいの？」

「いいんじゃない。この背に死体を背負うくらいなら、いつそのこと殺してくれた方が地獄まで行くのが楽でいいわ」

自虐と皮肉を混ぜたような物言いにジョンは完全に戦意喪失した。

「それに、疲れちゃつた。こんな生活。毎日毎日こんなところに閉じ込められて」

「国からの直々の命令だろ。収入も安定してて良い職だと思うぞ」
「なんで平然と会話してんだ、と自分で自分にツツコミを入れる。」

違和感も覚えていないミレーは会話を続ける。

「精神的なもんよ。確かにお金なんかはかなりの量が送られてくるわ。今では貯金だけでマンションが二つ三つ買える。でも、私には使い道が無い」

「どうして？」

「言わなきゃいけない？ 次々と戦争に駆り出されるせいで暇な時なんてあつたもんじゃない。『上の連中』にとっては私は成果を生む木でしかないもの」

「はあ……。君みたいに有名大学を出ていても、それぐらいの悩みはあるもんなんだな」

「もちろん。女の子に悩みの無い時なんて新婚生活ぐらいよ」

「例えば方が極端な気が」

「つまり」ミレーはジョンの胸に人差し指を突きつけ「大好きな誰

かといられる時に、悩みなんてちつぱけな物が入る隙間なんか無い
ってことよ」

「そういうもんかね」

ジョンは納得していないように肩をすくめる。

ミレーはため息をつくど、部屋の中心にあるテーブルへ向かう。

椅子を引き、座る。そしてテーブルに置いてあるガラスの箱に視線を移す。

ジョンは複雑な気分になりながら言った。

「ここから出たいか？」

二人の邂逅（後書き）

珍しく隠れてる

殺し屋らしくない殺し屋（前書き）

少々遅れました。

殺し屋らしくない殺し屋

「どうして？」

ミレーの視線はジョンに深く突き刺さる。

そりゃそうだ。

自分を殺しに来た殺し屋が、自分を助けてくれるなんて。

(どこの映画だよ……。全米も号泣しそうな話が書けそうだな……)

苦い顔を面に出さないよう注意しつつ、笑顔を崩さないようにする。しかし、ミレーからすれば、その顔はあまりにも不自然に見えた。

身振り手振りといった様子で伝える。

「いや、君は悪い人のようには見えないし。それに……」

「ここから遠ざければ解決するとか思ってたんの？」

「そ、そう！ それ！ ……あれ？」

「なにが、あれ？ よ。解決するわけないでしょ。国の内部が関わってるのよ？ いくらでも探す手段はあるの」

「なら、他人を装えばいいんじゃないか？」

「はあ？ 他人って言ったって、中身ごと変われって言いたいのか？ 言つとくけど、演技の経験はゼロよ」

「演技とかじゃなくて、ほら、名前や容姿を変えたり、性格だって今とは真逆のことをすればいいだろ？」

「最後のに関しては演技のことじゃないの」

「そうだったか。で、君はどうしたい？」

「そりゃあ、こんなところから出たいわ」

ミレーは、一言「だけど」と付け加えると、顔を俯きがちにして言った。

「ここから出るなら、どうしてもそれを伝えたい人がいるのよ」

「告発されたら面倒だな」

「しないわ！ あの人は……。確かに、私をここに閉じ込めた張本

人だけど……」

「……そうか」

ジョンは頷く。

「だが、俺も着いて行くぞ」

「えっ？ どうしてよ！」

「お前が俺の情報を流すかも知れない」

「するわけないでしょ！？」

「じゃあ聞くぞ」

ジョンは一拍置く。

「お前は俺を信じきれているか？」

その言葉にミレーは黙った。

当たり前だろう。どちらがどちらを信じられない立場か、なんて考えるまでもなくミレーだ。

相手は殺し屋。出た言葉は自分にとって都合のいい話。上手く行くとも思っていないに違いない。

「途中でやっぱり殺すんじゃないか、とか考えてしまってたんだろ？」

「当然じゃない！！ 怖いわよ、今あんたが今何よりも怖い。まるで悪魔の甘い囁きみたいに私を惑わすあんたが怖い」

「そりゃそうか。んん、どうすりゃ信じてもらえっかな」

しばし考え、ジョンはハンドガンを取り出した。

やはり、ミレーは「ひっ」と肩を跳ねさせ震える。

「弾を抜く。これならいいんじゃないか？」

「い、いいえ。銃は鈍器にだって出来るわ」

「じゃあこれをあんたに預ける？」

「あんたの腕力なら私を絞め殺すくらい出来るでしょ……？」

「それもそうか……。なら、腕を縛るか」

「ええ。それならだいぶ安心できるわ」

「まあ、次はどうやって着いて行くか、だけだな」

「研究員に変装すればいいでしょ？」

「それいい考え。服どこだ？」

ジョンの言葉にミレーは耳まで顔を真つ赤にさせた。顔は床の方を向きながら、指で後ろのロッカーを指差す。

「その奥に……私の着替えのが……」

「女物じゃサイズ合わないんじゃないか？」

「し、仕方ないじゃない。それに、身長は高い方よ？ モデルにだってスカウトされたし」

「はいはい」

軽く話を聞き流しつつ、奥のロッカーの扉を開ける。中は白一色で、女性の服とは思えないというのが感想だった。

一つを手に取り、幅を確認する。

「……ほとんど変わらねえ……」

筋肉のあるジョンにとっては少しキツイが、サイズはほぼピッタリだった。

ふふん、とミレーの鼻を鳴らす音が聞こえ、肩を落とす。

「俺、そんなに身長低いか？」

「あんたが低いんじゃないかって、私が高いのよ」

なんだか得意気に話すミレーにジョンは声を漏らして小さく笑った。ミレーもつられて笑う。

「あっち向いとけよ」

「はいはい」

促されミレーはジョンに背を向けた。

そして、小声で、呟くように言う。

「ありがと。おかしな殺し屋さん」

……。

「様になってるから大丈夫よ」

白衣を身にまとい、黒縁の度を抜いた眼鏡をかけたジョンの違和

感のありようは、寡黙なミレーも吹き出すほどだった。

部屋から出た二人は他の研究員がいる研究室を通る。入り口の横に地下へと続く階段があり、その先がミレーの伝えるべき相手がいる。

「……ば、バレないだろうな」

「バレないわよ。彼ら、人の顔を覚えるのは苦手なもの。多分、この中にいる人でお互いの顔を覚えてる人なんて半分もないわよ」

言葉通りに誰にも怪しまれず前を横切ることになった。

ミレーは階段に片方だけ足をかける。そして立ち止まった。

「……、突き落したりは」

「しねえよ！」

それでも疑いの目を向けるミレーの横を通り抜け、ジョンが先に降りる。

「これでいいだろ」

「そこまでムキにならなくていいのに」

クスクスと笑うミレーを背に、ジョンは肩を露骨に落とす。

「殺し屋って、疲れるなあ……」

殺し屋らしいこともしていないのに何を言うか。

二人は長い階段をコトコトと降りていった。

約束（前書き）

ポイント評価入れてくださった、ありがとうございます

約束

階段を降りると、結構広い場所に着いた。デパートにある地下の駐車場ぐらいの広さである。

ミレーに連れられたジョンは内心怯えながらも歩く。背を曲げているせいで後ろめたさがあるように見えてしまう。

目の前では一人の研究員が壁一面にあるモニターを眺めていた。「所長」

ミレーは凜とした声を発した。

研究員「所長はゆっくりと振り向き、こちらを見て柔らかな笑顔を浮かべた。

「ミレー博士か。どうしたんだい？」

「所長。いきなりですけど、私はここを出ます」

「……、そうか」

最初こそ驚いた顔をしていたが、所長はすぐに納得したような表情をする。

「プレゼントは、必要じゃなかったかな」

「いつか貰いに來ます」

「そうか……。で、そちらの男性は？」

視線はミレーからジョンへと移った。

ジョンが説明するのに戸惑っていると、見かねたミレーが話す。

「私を殺しにきた殺し屋らしいです」

「はあ。殺し屋ねえ」

少しの間、いろんな箇所を見つめられた。

うん、と所長は頷くとジョンの手を取り握手する。

「君がミレー博士を助けてくれるんだね？」

「え、ええまあ」

「ありがとう。君には感謝しきれないよ」

殺しにきたのに、いつの間にか感謝されていた。ここまで世にも

奇妙なことも無いだろう。

「で、二人とも。どうして来たんだ？」

「ミレーが別れの挨拶がしたいだよ」

「ちょっと！」

ミレーが顔を赤くしながらジョンの口を塞ぐ。

「別れの……挨拶か」

「私、もうここにはいたくないの」

「ああ、当たり前だろうな」

「最悪だし、兵士もどこか頭のねじが外れちゃってる」

そこから愚痴を延々と話す。

所長はそれを笑って聞いていた。

夜に兵士何人かが部屋に入ってきたとか、戦争の飛び火で死にかけたなど。

「だから」

言うことは言った、そう顔で表現している。

「私はここを出る」

「そうか……」

「だから、最後に言おうと思うの。ここまで育ててくれたアナタに
対して」

「……」

「あなたは、私にとって、本当に大切なおと」

「そこで何をしている……！」

突如、地面を揺らしそうなほどの大音量が響いた。声はうなり声のように深く、悪寒が走るほどに怖い。

一斉に振り返ると、そこにはジョンが双眼鏡を覗いていたら見つけた大男がいた。

あの衝動のような感覚が体を駆け抜ける。しかし実害は無く、トラウマが起こした錯覚のようだ。

大男はこちらへと歩み寄ってくる。

「ミレー博士。あんたにはここにいてもらわなくちゃいかん」

「ゼニア……！」

「どうしてそんな好戦的な目をする？　いつものようにただの製造マシンとして冷徹に振る舞ってればいいものを」

ミレーにゼニアと呼ばれた大男は拳を鳴らしつつ歩いてくる。

ジョンはとつさに身構え、銃に手をかけた。

ゼニアはジョンの方へ向き直る。

「貴様が……殺し屋か？」

「そうかもな」

「なかなか話が早いな。ここで潰しておくか」

ゼニアは腰からハンドガンを引き抜く。間髪入れずに発砲した。

ジョンは転がることによって避けることが出来た。

外れた弾丸は壁に当たり火花を散らして落下した。

「なかなか動けるらしいな」

「それでも殺し屋、だからな……！」

「ほう。つまらん仕事だ」

ゼニアは次にサブマシンガンを取り出す。

「銃器に生身で勝てるか！？」

引き金は引かれた。何発もの弾丸がジョンへ向かっていく。

「くそっ……！」

ジョンは姿勢を低くしながら横に走る。弾丸はジョンの足元など、間一髪のところにあたっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2049t/>

殺し屋ジョン

2011年10月5日03時27分発行